間違いから始まる異世界の旅

ナビスケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
間違いから始まる異世界の旅

【Ｎコード】
Ｎ８９１９Ｖ

【作者名】
ナビスケ

【あらすじ】
ただの少年の市黒正樹（シグロ マサキ）は、ある日殺されてしまう。
そのまま神様と会い、間違いで殺されたこと知る。
そのまま新し世界に行くなんて小説みたいだなと思っていたら、
神様「あと、君は勇者じゃないから」
正樹「はあぁ？」
神様「だから、もう勇者は呼んじゃってるんじゃよ」
神様「あと、勇者より弱いから君」
正樹「なんでだよ」

神様「仕方ないじゃん勇者五人に力与えちゃたし」
どう生きろというんだろう

注意＊主人公はチート気味です、苦手な方は戻ることをお勧めします。

プロローグ（前書き）

初投稿です
ひどい文書ですがよろしくお願いします。

プロローグ

―とある砂漠―

腹が減った、のどか乾いた、もうダメぽ、これが数時間砂漠のど真ん中を歩いて来た感想だ。
「どこまで続くんだよコレ」
今までひたすら歩いて来たが、これといってオアシスや街などは、見ていない
（滅びた街なら見たのだが・・）
「なんでこんな目にあってるんだっけ？」
数時間歩いて喉も乾いたし、腹も減ったそしてこの暑さだ。
（ダメだ死ぬかも・・）
意識も朦朧として来て真っすぐ歩けている自身が無い。
（元はといえば、あのクソ野郎のせいだ）
意識が途切れかけてるなか、ただの少年“市黒（しぐろ）　正樹（まさき）は、一人寂しく愚痴をこぼす。

―回想―

部活を終え、誰もいない小さなアパートに戻って何を食べようかとコンビニで買ってきた物を漁ってる時に家のインターホンが鳴った。
「はーい、どちら様で？」
自分には、たいして友達がおらず宅急便だと思い確認もせず玄関の扉を開けてしまった。
「今日は貴方を殺しにきました、恨まないでね」
「はい？」
意味も分からず正樹は、この世界を旅立った。

―死後の世界？―
「あれ、ここはどこだ？」
気づけば真っ白な部屋にいた、あ～そうだ死んだんだったと、呟きながら適当歩いて行く
死んだと言う事実は分かるがイマイチ感じが掴めて無かった。
死後の世界なんて信じてなかったんだが実際あるんだから仕方が無いさてこれからどうしようかなーと、適当に考えたら声が聞こえてきた。

「さてさて、ようやく気づいたんじゃな」
何処からか、老人を思わせる声が聞こえる。
「いったい何処にいるんだ、お前は誰だ！」
広い真っ白な部屋には誰の姿も見当たらない
「お前とは失礼な奴だな、わしは神様だぞ」
おk俺は刺されたせいでおかしくなってるようだ。
だから神様の声なんて幻聴が聞こえ「幻聴じゃないぞ」まだ聞こえるんだが。
「だから神様じゃ幻聴とは、失礼な」
「だったら姿を現せよ、あと人の心を読むな」
何でわっかたんだろう？やっぱり「神様だからじゃ」　「人の心を読むなといっただろ」
「すまん、癖じゃ」　「癖かよ、いいから姿を現せ」
ほほほ、という言葉ともともに白い服を着た自称神様が出てきた。
姿を何かに例えるとしたら、ローマ法王がしっくりくるだろう。
「さてと、なぜ君を呼んだか話をしなくてわな」
どうやら面倒なことになったらしい

プロローグ（後書き）

ありがとうございます。
ナビスケです。
初投稿なの上に文章力がないですがこれからお願いします。
文章量が少ないですが頑張ります。

第一話　～死んだ理由～（前書き）

味っ気のないタイトルですみません。

第一話　～死んだ理由～

「さてと、君を呼んだ理由を話さなくてはな」
自称神様は、真剣な顔つきになり俺を見てきた。
「まず、君は本当はここにくるはずない人間だったんじゃ。じゃがチョットした間違いが起きてしまってな君は、殺されここに来たと言う訳じゃ。」

なんかすっごいテンプレデスね、自分がこんな目にあった時は言葉も出ないなんて始めて知ったよ。
「で、俺はどうすればいいのですか？」
悩んでも仕方ないので、取り合えず聞かないとな。自分から動かないと始まらないんだし。
「なかなか切り替えが早いのう、正樹の魂は違う世界に送るから心配せんでよいぞ。本来なら正樹の世界に返すのが道理なんじゃが、世界を繋ぐ扉は閉まりかけててな魂はもう送れんのじゃ。」

正樹の肉体も死んでおるしのと、本当に申し訳なさそうにしゃべる自称神様がそこに居た。
（なるほど、肉体がしんでるから魂だけ異世界に送るのか、とことんテンプレだな。）
「俺は異世界に行けばどうすればいいんですか？肉体は、どうなるのですか？」
今、気になる事といえばコレぐらいだろう。
「そうじゃな、肉体の方は前の世界と同じように作り直すから心配せんでよいぞ。」
それは、有難い小説とかじゃ赤ちゃんから始めるからな。
「使命としては、本来なら勇者として力を与えるのじゃが勇者は、

もう送り込んだだからのう」
あれ、本来ならここで勇者誕生なのにもう他の勇者がいるだと？

「ほかの勇者とは、どうゆうことでしょうか？」
「その事に関してじゃが、私が統治している世界で魔王が来てしまってな、仕方ないからそちらの世界の神をおど・・・説得して五人もらう事になっているんじゃ。」
今、脅してと聞こえかけたが気のせいだろう。
「俺の世界にも神は、居たのですか？」
「神は、どこの世界にもおるのじゃよ。因みに正樹が居た世界は、数ある世界の中でもトップクラスの力を持っておるのじゃよ。」
「神がですか？」
「いいや、世界自体じゃ。神自体に関しては、個体差は有るがたいして変わらんのじゃ。少し道にそれたな話を戻すぞい。「おk」勇者に関しては、さっきも言ったとおり五人いるからいらないんじゃ。しかも、ワシは五人に力を与えたせいでたいして正樹に力がやれん。」

五人いるから勇者は要らないしかも、その五人に力をやったため俺に対しては、対して力がやれないらしい。
（どうすればいいんだ、正直チートが無かったら生き残れる自身は無いぞ）
「力に関しては、少しそちらの神から奪って来たんでな勇者ほどでは無いが、ある程度の力は渡せるぞ。
それ以外にも問題があるんじゃかな」
（良かった体のスペックに関しては、問題無いようだな。有ってもつかいこなせる自信は・・無いな）
宝の持ち腐れにならないように頑張ろうと密かに心に決め質問を再開する。
「他の問題とは、なんですか？」

「他にある問題としては、伝説の防具と武器がない事じゃな。」
伝説の防具と武器って、すごくＲＰＧぽいな。まぁ、有ったとしてもつかえこなせる自信が無いが、体のスペックと同様に。
「そういえば、まだ殺された理由を聞いていないんですが、なんなんですか？」
よくよく考えればこれを聞くために話をして居たのだ。
「その事に関してじゃが実は、正樹も勇者候補だったんじゃ　この指令書に書いてあるとおり、消してあるのじゃがな。」
差し出された指令書には、確かに二重線で引かれた俺の名前が有った。
「では、なんで俺は、殺されたんですか？」
指令書には、確かに二重線で引かれて消されている。だけど実際に俺は殺されてしまったんだ。
「どうやら操った殺人鬼は、元々正樹を狙ってたようじゃついでに殺されたんだろう。」
ついでに殺されたって、人の命をなんだと思ってるんだ。
それに、殺人鬼に殺されるような事は、一つもしてない自信がある。
「済まぬ、全てはわしが招いたことじゃ。誤って済む事では無いが済まぬ。」
俺は、神様に凄く深く謝られたじろいてしまった。

「取り合えず顔を上げてください、恨んでませんから。」
そうか、済まぬともう一度神様は謝り話を続ける事ができるようになった。

第一話　～死んだ理由～（後書き）

誤字脱字があれば、教えていただけたらうれしいです。

今回は、説明と会話が多すぎたような気がします

間の取り方などこれからも勉強していきたいです。

第二話～貰い拾われ～（前書き）

小説書くのって大変ですね

お楽しみください

第二話～貰い拾われ～

一通りの話し合いが済んだあと、新しい世界の準備をする事になった。
「正樹は、前の世界にある物で持っていきたい物は、有るかのう？」
いきなりにシンカ（神様の名前で話し合いの最中に教えてもらった。）に話しかけられ戸惑ってしまう。
（持っていきたい物なんて特には、ないんだか・・）
「なにもないのかのう？」
「部活で使ってた道具を持ってくるのはいけますか？」
悩んだ末に出した結論は、自分がやってる部活の道具だった。
「部活の道具とな？この弓の事かのう？弓を嗜んでたのか？」
正樹は、部活として中学生の頃から弓道をしていた。
異世界に行くならば、武器の一つや二つくらい持っていきたかったのである。
「洋弓も和弓ありますから、両方持って来てください。」
分かったわいと言いながら、手で何かを操作している。すると、自分の目の前が光ったと思ったら自分が愛用している弓具が出て来た。
「ふむ、なかなか多いなチョット待ってくれんかのう。」
シンカは、弓具を手に取り黒いリストバンドにして俺に手渡して来た。

「これは、なにですか？」
渡されたリストバンドを触ってみるが市販で売っているようなリストバンドにしか見えない。
「この中に弓具を全部いれて置いた、正樹が念じれば出るようになってるから使ってみると良い。」
リストバンドの大きさは、手首を守るサポーターぐらいの大きさだったので、

この中に入ってるなんて思いもしないだろう。
「あと、これも正樹にあげるようぞ」
そう言って手渡されたのは、白色のリストバンドと、銀色のネックレスだった
「伝説の武器ほどでは無いが、魔力を＜形状変化＞と＜形状固定＞できるようにしてあるんじゃ
魔力を溜める事もできるし、溜めた魔力はオートで身を守ってくれるんじゃ。
あと、このネックレスは、状態異常を防いでるのと魔法と物理攻撃を半減してくれるのじゃ。」
とんでもない装備をもらってしまった。大事にしますと言って、黒は左手首に白は右手首に付けた。

「わしがしてやれる事は、これくらいじゃ。あとは、正樹自身頑張ってくれ」
シンカにそういわれ俺は、死後の世界を旅立った。

ーとある砂漠ー

体が動かない、勇者が召喚された国の中に降りるといわれて降りた先は、砂漠だった。
数時間歩いて彷徨ったが、”セフィルス”と言う国なんて見えてこない、最終的には倒れてしまったのがいまの状況だ。
（シンカめ、転移場所間違えたな）
もう死ぬのかなと思って居たら、目の前から人がくるのが見えた。
（天使でも舞い降りたんだろうか？）
そんな事を思いながら、よく見ると女の子を先頭に騎士のかっこを

した人たちが歩いて来ている。

待つこと数分、先頭に歩いていた女の子は、目の前まで来てこう言った。

「セフィルス国の第二皇女　　セシル・セフィルスです。貴方は、神様から新しく召喚された人ですか？」

笑顔でてお伸ばして来たセシルの手をつかむ

「残念ながら勇者では、無いけど　　マサキ　シグロだよろしく。」

この世界に来て始めて人に会えた事がとても嬉しかった。

第二話～貰い拾われ～（後書き）

どうもです。

今回は、ここで少し主人公のことを簡単に書いと来ます。

マサキ　シグロ
十六歳

身長１７６センチ
体重６０キロ

弓道部に所属しており
アーチェリーも少しかじっている
今作品の主人公
顔の良さは、中の下から中の中ぐらいと言う微妙な顔。
幼い頃に両親が離婚して母親にそだてられた。
運動神経はそんなに良くない。
どうでしょう、次回もよろしくお願いします。

第三話～オアシスの中で～（前書き）

お楽しみください

第三話～オアシスの中で～

？

セフィルス国の王都セフィルスは、大陸のど真ん中にある都市であり神（シンカ）が初めに造った都市であるらしい。

周りを広い砂漠で囲まれているが、地下水脈があるらしく水には困ってなくほかの都市いくらべると豊かな方らしい。

？

以上、セシルの護衛騎士　マルクさんのお話でした。ありがとうございました。

今、俺は何処にいるのかというとまだ砂漠の中にあるオアシスにいたりする。

前回と違うのは、騎士に囲まれていることと第二王女のセシルがいることだろう。

俺は、セシルの手を取ったあとそのまま気絶してしまったらしく騎士の皆様にオアシスまで運ばれたらしい。気が付いた俺は、体力を回復させつつマルクさんの話を大人しく聞いていた。

？

マルクさんの話を聞いて数十分、気絶していた時間は知らないが体力のある程度を回復できたと思う。

？

「それじゃあ、これからどのように行動するのですか？」

俺は、この世界じゃあ右の左も分からない身だから指示を受けて行動していけばいいだろう。

「そのことに関しては、私が説明します。市黒様にはこれから王都に戻り国王と会ってもらいます。

そのあと、勇者様と会って貰い今後の方針についての話し合いがあります。」

？
わかりましたと言いながらセシルを観察する。きれいな銀色の髪を肩を超すあたりまで伸ばしており、澄んだ翡翠色の目をっ持ている。すぐに気絶していたので詳しく見ていなかったがとてもきれいな顔立ちをしていた。
？
「とりあえず、俺はマサキと呼んでいいよ。王都に行くにも足はどうするの？」
周りを見るか、鎧を装備した騎士はいても馬やラクダのようなものは、見当たらなかった。
？
「私たちは、移動の補助魔法をかけてきたので徒歩なのです。マサキ様は、姫様の幻獣で移動をしてもらいます。」
？
げ、幻獣ですか、幻獣と聞いたら　タイタンやリヴァイヤサンを想像してしまうんですけど。
？
「これが私の幻獣のクーよ」
そういいながらセシルは、自分の何倍もある巨大な鳥をつれてきた。体の色は、灰色に近いが日の光りを浴び銀色に輝いていた。

「セシル様の髪と同じ色なのですね。とても綺麗です。」
「幻獣はね、術師とそっくりな物が生まれるのよ。
あと、私のことは、セシルって呼び捨てにしてくれない？　敬語とかそんなに言われるの好きじゃないの。」
「わかったよ。それじゃあ、この子に乗って王都まで行くのかい？」
「ええ、さあ乗って詳しい事や質問は、クーの上で聞くわ。」

俺は、マルクさんや騎士の皆さんにお礼を言ったあと、クーの背中に跨った。

「さあ、行くわよ。クーお願い。」

セシルがクーに呼びかけるとクーは、一声鳴き俺とセシルを乗せて飛び立った

第三話～オアシスの中で～（後書き）

一回ＤＡＴＡが飛んで更新が遅れました

誤字脱字があれば、こそっと教えてください。

第四話～幻獣に乗って王都へ～（前書き）

お楽しみください。

第四話～幻獣に乗って王都へ～

――セフィルス南砂漠上空――

「すごいな、本当に空を飛んでるよ。」

オアシスを離れて数分がたった。最初は、高くて怖かったがなれるととても風が気持ち良かった。

「マサキの世界じゃあ、幻獣や飼いならされた魔獣は居なかったの？」

すごくセシルは、俺の反応に対して不思議そうに聞いてきた。

「いや、俺の居た世界では、幻獣も居なければ魔法もない世界だったよ。」

「そういえば、今回きた勇者も同じことを言ってたわね。魔法じゃなくてカガクってのが発達した世界だったって。ニホンって国に居たらしいわ。」

どうやら、勇者御一行達は俺と同じところから来たらしい。

（良かった，アメリカらへんから来てたらどうしようかと思ってたぜ。）

「勇者って役割（ジョブ）ってもう決まっているのか？」

「ええ、パラディン、レンジャー、ヒーラー、アーチャー、バッファー、どれも役職はこの前決まったわよ。」

ブッファーとかヒーラーを聞くと、前の世界のＭＭＯＲＰＧを思い出すな。

ここで少しジョブについて話しておこうと思う。
まず、パラディンは実質上勇者御一行のリーダーであり、役割的には相手の敵陣に特攻して行くアタックディーラーである。

次にレンジャー。レンジャーは、罠を仕掛けたり、作戦を考えたり、パラディンの攻撃の援助またはブッファーの護衛が主な役割のシーフみたいな役割をするジョブである。

ヒーラーは、その名の通り回復や補助魔法を掛ける白魔導師の役割である。

アーチャーは、後衛から攻撃力をする狩人的存在で戦場では、ブッファーと共に行動をする。

最後にブッファーだが、後衛から攻撃魔法や相手の補助魔法を打ち消したりなどの黒魔導師の役割をする。
（なんか、全部某人気ＲＰＧに居そうなジョブだな。）

「役割に関しては、どうやって決めたんだ？」
「役割は、神様からのお告げがあったからすぐに決めれたわよ。一応、本人たちの意見も聞いたんだけどね。」
「そうですか。そう言えば俺に対するお告げは？」
なんか、役割が与えられてるかもしれないと期待しながら聞いてみた。
「マサキに関しては、砂漠で迷ってるとしか無かったから、神様から何か聞いてないの？」
いやいや、俺なにも聞いてないですよ。取り合えず、自分で考えろと言うことか。ハァ～

「もうそろそろつくわよ。」
厄介ごとが増えたなーと考えて居たら、もうついたらしい。
「分かった。あの城がセシルが暮らしてるところ？」
城壁で囲まれた街の真ん中には、大きな城がたって居た。
城の感じとしては、中世の時代にありそうな城で所々にバリスタや、大砲なんかが置いてあった。
「ここが私の家、ようこそ、セフィルス城へ。」
そういいながら、セシルは大きな庭にクーを着陸させる。

「さてと、このまま私の父さんに会いに行くわよ。」
そう言いながら、セシルはクーから降りると歩いて行った。
「いや、チョット待ってくれ。」
俺は、クーから滑るように降りるとセシルを急いで追いかけた。

さてと、俺の新しい人生がどうなるかは、これに掛かっている。
気合を入れて頑張ろう。

第四話～幻獣に乗って王都へ～（後書き）

どうもです。
部活が忙しく昨日は、更新できませんでした。
やっと、王城に入れました。
本当は、もっと早かったはずだったのですが。
思うように進みませんが、頑張っていきます。

誤字脱字があれば、教えてください。
お願いします。

第五話～王城での出来事　前～（前書き）

お楽しみください。

第五話～王城での出来事　　前～

どうも、この話の主人公の市黒　正樹です。
今、俺とセシルは王様と会える部屋があると言うのでその部屋に向かって、王城の廊下を爆走中です。
ん、なんでそうなったって？それは、少し前に話が戻るんだぜ。

――数分前――

クーから降りてセシルに追いついた後、長い廊下をひたすら歩いていた。
「なあ、いつになったら王様に会えるんだ？結構歩いていた気がするんだけど。」

「王の間は、もう少しだけど少し寄り道をさせてくれない？」
「別にイイけど、何処に寄るの？」
俺としては、早く王様にあって休みたいのだが。

「警備室に寄るわよ。服装を変えなくちゃ行けないしね。」
「服装を変えなくちゃあ行けないのは、分かった。でもなんで警備室？」
今彼女が着ている服は、所何処のにプレートがはめ込まれた砂漠を渡るための軽装である。いくら親とはいえ国王に会うには、このかっこで会うわけにはいないのだろう。

「あれ、言ってなかったっけ？私は、国の警備部隊を治めているのよ。だから、私の服も置いてあるの。」
この装備も警備の物から借りて来たしね。と言いながら歩いて行く。

「警備隊って騎士団のこと？オアシスに連れて来たようなやつ。」
オアシスのいた人たちは、甲冑姿では無かったが所々に紋章が縫われていて、セシルより重装備だった。

「あれは、騎士団だよ。騎士団は、国王直々に持っている部隊で国同士の戦争や外の魔獣とかと戦っているわ。警備隊は、国の中の揉め事や祭りとかの警備、国内のこと専門としてるわ。」

どうやら、騎士団と警備隊は違う物らしい。前の世界で言う、自衛隊が騎士団で警察が警備隊と言う感じだと思う。それにしても、セシルが警備隊を仕切っているとは思いもし無かった。だけど、第二皇女と言われていなかったら納得していたかもしれない。

「着いたわ。私は、中で着替えるから覗かないでね？覗いたら痛い目にあうよ？」
「分かってる。覗かないよ。」
そう言うとセシルは、満足そうに笑い部屋に入って行った。
（流石に警備隊長様の着替えを覗くほど、命知らずじゃ無いさ）

「そこの貴方！ここがどこだかわかっているの！平民が勝手に入っていい場所じゃ無いのよ！！」
暇だなーと警備室の前の廊下をウロウロしていると、見知らぬおばさんに話しかけられた。

身体中に宝石を散りばめた、いかにも貴族ですって感じの人が近寄って来た。
（こうんな時は、無視に限る。）　そう思いながら無視を決め込んでいたら、金切り声で喚き始めてきた。

「貴方なに私を無視しているのよ！！私はねぇ、国王の側室で第三皇女の母親でもある、カルニスト様よ。貴方、見慣れない格好をしているけどどこの人間よ！　まさか、新たに召喚された六番目の勇者じゃぁ無いでしょうね？　汚らわしい、ナレー、今すぐ魔術部隊を呼んできてこの者を焼き払う様に言ってきなさい！！」

しまったな、側室だったか。それにしても一人でペラペラと喋るおばさんだなぁ。

てゆうか、魔術部隊ってなんだよなんか、俺殺されそうなんですけど！

「汚らわしくて、役に立たない異世界人など居ない方がマシだわ。今ここで殺されることを感謝しなさい！」

流石にこれには、頭にきた俺はこのババァを一発殴ってやろうとした時、横から俺の腕を止める様に手が伸びてきた。

「やめて下さいカルニスト様、マサキも手を引いて。」

いつの間にか横にいたセシルは、俺を制ししながら俺の前に出た。

「この方は、国の大事な客人です。手を上げることは、許しません。」

「客人？そんな、薄汚れた豚が？それに貴方に命令される筋合いなんで無いのよ。

警備隊なんて薄汚れたものを任された役立たずの貴方にはね！」

さっきから言いたい放題言いやがって、ぶん殴りたい衝動を抑えつつババァを睨んでいることしかできなかった。

「薄汚れた？私の部下は誰も汚れてないし、私は役立たずでもない。

むしろ、命令するしか脳がないカルニスト様とルフィーの方が役立たずだと思いますけどね！」

「何ですって？私もルフィーも魔術師として優秀だわ。それになに、ルフィーのことを呼び捨てにしているのよ、様をつけなさい様を！」

「なにを言っているのです？ルフィーは、私の妹ですから様なんかつけるわけが無いじゃないですか。
第三皇女のお義母様？」

女の喧嘩って怖ぇー、さっきから凄く言い争ってるんだけどどうすればいいのだろう？
ん、目の前からローブを着た人達が走ってきたんだけどもしかして・・・

「セシル！何か走ってきたんだけど！」

「げ、魔術部隊だわ。マサキ！走って逃げるわよ。着いてきて。」
やっぱり、魔術師だったか。走って逃げているセシルの背中を追いかける。
チート補正によってなんとか追いつける様だ。
そして、俺とセシルＶＳ魔術部隊の追いかけっこは、幕を開けた。

第五話～王城での出来事　　前～（後書き）

どうもです。
今回は、二部構成なので次を早く出したいです。

お気に入りにいれてくれた方ありがとうございました。
励みして頑張ります。
会話多くね？とか、思いながら書いてますがよろしくお願いします。

誤字脱字があれば、教えてください。

第六話～王城での出来事　後～（前書き）

お楽しみください。
強引に時間を元に戻してます。

第六話～王城での出来事　後～

どうも、この話の主人公の市黒　正樹です。
今、俺とセシルは王様と会える部屋があると言うのでその部屋に向かって、王城の廊下を爆走中です。

ん、前にもみた事があるって？それは気のせいさ。
べ、別に作者がめんど臭くて無理矢理時間を戻したんじゃないんだからね！

おばさん（カルニスト）と魔術師から逃げたのはイイけれどまだ後ろから追いかけてくる音が聞こえる。
魔術部隊も二十人以上いるし、おばさんも魔術師って言うし。
それに対してセシルは、魔術も幻獣も出せるけど役立たずの俺をかばいながら攻めに転じることなんてできないだろうし、俺も弓を持ってきてるけど走りながら相手を射る自信はない。

「どうするセシル？なんか、もう追いついてきてるんだけど。」

「クーをだすにも狭すぎるし、魔術を唱えるにも時間がなさすぎる、こうなったら＜詠唱破棄＞しかないわね」
何かを決心した様な顔つきでセシルは、一人うなづいた。
「＜詠唱破棄＞ってなに？呪文を唱えないって事？」

「まぁ、そんな感じ。威力も下がるし、疲れるけどね。＜エアーウォール＞」

突如俺達と魔術部隊の間に空気の壁がができた気がした。

できた気がしたと言うのは、壁自体は見えないがそこに何かがある気がした。

「良しこれで、足止めをできｔ「足を止めないで！」　え？」

後ろを振り向くと、さっき空気の壁があった場所が燃えていた。

「え、何で破られてるの？」

「火属性は風属性につよいのよ。早く逃げるわよ。」

突っ立ったいた俺の手を引っ張って走り出す。

俺が足を止めたせいで、魔術師達はとても近づいていた。何かセシルと俺を守る方法は無いのだろうか？

黒のリストバンドは、武器しか入ってないしネックレスは俺しか守れない。白のリストバンドは魔力の使い方がわからないと使えない。

ん、リストバンド？

「そうだ、セシル俺に魔力の使い方を教えてくれ！」

使い方さえわかればいいんだ。幸いこのリストバンドは、魔力さえ込めれば自動で防御してくれる！

「何で今教えなきゃいけないのよ。戦う気？」

勝ち目は無いわとでも言いそうな顔でこちらをみてくる。

「イイから早く教えてくれ、時間がない。」

こうしてる間にも魔術師達は追いついてくる。

「わかったわ、一回しか言わないからよく聞いてね。体の中に流れてる物を感じるのそれが魔力よ。それを＜ファイヤーボール＞ならその姿を想像するの。何かに流す時は、その場所に流すイメージをするのよ。」

体の中の魔力を感じるため集中する。

（体の中に水みたいのが流れてる、これが魔力か。）

掴んだ魔力を右手のリストバンドに流れる様にイメージする。すると、リストバンドが少し光が帯び始めた。

「よし、流せるぞこれで・・・痛っ」

魔力を流す量を上げると腕を強く締め付けられる様な痛みが走った。

「なにやってるの。魔力に慣れてない奴がそんなに流すと体が壊れるわ、流す量を下げなさい。」

セシルにそう言われて魔力を流す量を下げる。

「ねぇ、まだつかないの？だいぶ走ったんだけど？」

「もう着くわ、あの曲がり角を曲がったらすぐっ　下がって！」

セシルが言い終わる前に目の前から岩の壁が現れた。

「やっと追いつきましたわよ。この薄汚い豚ども、その壁は私が作った＜ロックウォール＞よ。

そう簡単に破れる物ではないわ、大人しく殺されなさい。」

目の前に現れた岩の壁は、そう簡単に壊れてくれそうにない。

「ねぇ、何秒あればクーを呼べる？」

「え、三十秒集中できたら呼べるけど。どうする気？」

どうするもこうするも、その三十秒を稼ぐのだ。三十秒間俺が持てばこちらの勝ち、俺が持たなければ俺たちの負けだ。

「時間を稼ぐから、呪文って唱えたほうが力が強いんだよな？」

「ええ、呪文は唱えたほうが強いわ。本当にやる気？」

「やるさ、だから今から唱えてくれ。いくぞ！！」

後ろから俺に促されて唱えるセシルの声が聞こえる。

俺もセシルを守る為に呪文を唱える。
「＜この世界にいる神よ！我が友を護る為にその力をよこせ。＞」
「死になさい。魔術部隊、撃て！」　「＜絶対防御＞」
俺とカルニストの声がかぶる。それと同時に、魔術部隊から数え切れない魔法が飛んでくると同時に、俺の目の前にリストバンドからシールドが現れる。
魔法がシールドに当たるごとに自分の魔力が削れて行くのが分かる。
そして、体の中に流れる魔力が三分の二を消費したところで約束の三十秒が立った。
「下がっていいわよマサキ。後は、私がするわ。」
銀色の翼を持ったクーとその横にセシルが立って俺とカルニストの間に立ちふさがる。
「さて、カルニスト様どうしますか？戦っても貴方達には、負けるだけですよ？」
カルニストが後ずさる、それほど幻獣は脅威と言う事か。
「カルニスト様、このままでは勝ち目がありません。撤退しましょう。」
一人のローブ姿の女性がカルニストに撤退を話している。
「なにふ抜けた事を言っているの！こんな狭いところなんだから、私たちの方が有利でしょ！幻獣一匹も倒せないなんてなんの為の魔術部隊よ！！」　「しかし・・」
「別に戦ってイイけど、ここは王の間の近くよ側室の貴方がこんな

ところで戦っていいのかしら？第二皇女と。」
とどめの一撃と言わんばかりの言葉をセシルが放った。
「くっ、覚えておきなさい。総員撤退っ！！」
最後に三流なセリフを言ってカルニストと魔術部隊は、帰って行った。

「さあ、国王に会いにいくわよ。」
振り向いてそんな事を言ったセシルの顔は、勝ち誇った顔だった。

第六話～王城での出来事　後～（後書き）

どうもです。
すぐに出すとかイイながら出せませんでしたすみません。
まぁ、白のリストバンドの力が出せたのでよしとします。

誤字脱字があれば、教えてください。

第七話～王様との出会い～（前書き）

お楽しみください。

短めです。

第七話～王様との出会い～

今、俺がいるのは王の間と呼ばれる王様と王妃がいるところらしい。
うん、お腹痛い。だって、一国の王ですよ、トップですよ。胃が痛くて死にそうです。
俺が大きな扉の前でそんな事を考えていると、セシルが遠慮なく扉を開けはなった。

「第二皇女セシル　セフィルスとマサキ　シグロ、ただいま参上致しました。」

大きな声でそう叫ぶと王の間に入って行った。
慌てて俺もその後を追う。

「おお、セシルよやっと帰ってきたか。六番目の勇者様をちゃんと連れてきたか、流石私の娘だ。」
テラスから歩いてきたのはジョウロを片手に持ったおじさんだった。

（おかしいな、一国の王が趣味の家庭菜園をしてました。みたいな姿のはずないじゃないか、きっとあれは別人ｄ「私のお父さんよ」マジかよおいってゆうか、人の思考に入ってくるな。）
「口に出てたわよ、あの人は正真正銘のこの国の王で私の父、ルーク王だよ。」

今までいろんな小説読んでいろんな王を見たけれど、家庭菜園をしながら出てきた王は始めてだよ。
身長は俺より低いがそこそこでかい方だろう。
セシルと同じ銀髪で赤色の目をしているが、顔がおっとりした顔な

ので怖いとゆうより優しい印象が強い。それに短パンシャツ一枚なのは、何故だろう？

「こんな国王で大丈夫か？」
「大丈夫だ、問題ない」
「セシル、その返事は不安が増えるぞ。」

誰がフラグを回収するのだろう？俺な気がして仕方が無いんだが。

「ちょっと待っていてくれ、司祭を呼んで来るのと服を着替えてくるからな。」
そう言いながら、ルーク王は出て行ってしまった。
「私も、母さんを連れてくるね。」
そう言いながら、セシルも出て行ってしまった。

ひとりぼっちなんだが・・・

数分後ーー王の間ーー

「いや～、さっきは済まなかった。セシルが幻獣を使ってすぐ来るとは思わなかったんでな。変なところを見せてしまった。」

みんなが出て数分後、この部屋にもぞろぞろと人が入ってきた。そして、ルーク王はさっきの姿から一転して、白いマントをつけた服をきている。
「いえいえ、気にしてませんから。お気遣いなく。」
日本人だからなのか、どうしても腰が低くなってしまう。

「ふふふ、貴方ったら。ごめんなさいね、うちの旦那は趣味をしている時周りの事を全て忘れて没頭してしまう癖があるの。」

そう話すのはセシルの母、セフィルス国の王妃　、サヤ王妃だった。セシルとは違い、水色の髪の毛をしていて、目の色は碧色だった。サヤと言う名前が日本人ぽくって親しみを覚えれる人だった。

「趣味なら仕方ないですよ、俺も本を読んでいる時は周りが見えなくなりますから。」

うん、趣味なら仕方ないよね。

「では、マサキの今後についての話し合いとその他諸々の儀式を始める。」

なんか、まためんどくさい事が起こったらしいです。

第七話～王様との出会い～（後書き）

どうもです。
今回は、ヒロインのセシルについて書きます。

セシル　セフィルス
十六歳

身長　１６２センチ
体重　秘密

特技　母親から受け継いだ幻獣を操る力。
風と水の魔法を得意とする。風の方が得意。

警備隊の総隊長を勤めとおり、性格は負けず嫌いだがとても優しい子である。
普段は、髪をポニーテールにしている。
余談だが、警備室で着替えた服は長ズボンとシャツ一枚と言う、本当に皇女かと疑いたくなる様な楽な服装である。

以上、誤字脱字があれば、教えてください。

第八話～O　HA　NA　SHI～（前書き）

お楽しみください。

第八話～O　HA　NA　SHI～

「では、マサキの今後についての話し合いとその他諸々の儀式を始める。」
えーめんどくさいー
どうも、マサキです。凄く王様に今後の事を話し合うと言われました。
いつか話し合わなくちゃいけないけど、実際とっても面倒くさいです。

「今後についての話し合いは分かりました。その他諸々の儀式とは？」
俺は、間違っても勇者じゃないし、関わるつもりもあまり無いのだが。

「対した事はないよ、マサキ君の魔力の量と属性を調べてその後に神様に六番目の勇者の役割（ジョブ）についてのお告げ聞くだけだよ。」
魔力はわかるけど、六番目の勇者って・・・

「魔力については、分かりました。ですが、勇者についてのお告げは聞かなくてもいいと思います。」

「ほう、それはなぜだい？」
ルーク王が不思議そうに聞いてくる。まぁ、それもそうだろう。

「それは、俺は間違ってこの世界に転生されたから。神様本人にも間違ってきた事、俺が勇者じゃ無い事は知らされてます。」
王の周りが騒がしくなる。俺を睨んでくる貴族たち、驚いた顔で話し合う騎士団たち、不敵に笑う魔術師達ってなんでお前たちは、笑

ってんだよまたなんか考えてるのか？セシルは、前から知っていたので落ち着いて周りを眺めてる。

「皆さん落ち着いてください。もし本当にマサキ君が勇者じゃなければ、なおの事今後について話し合わなくては、いけません。」
そう言ったのは、セシルの母サヤ王妃だった。
（この人全く動じてない。セシルから聞いていたのか？）
サヤ王妃の一言でみんなが静まっていく。

「ありがとう、サヤ。君のおかげで、混乱が収まったよ。流石私の妻だ。では、マサキの今後についてはｎ「その必要は、ありませんわ」カルニストか。」

この声はと後ろを振り向くと、さっきまで俺たちを追いかけ回してたカルニストの姿があった。

「どうしたのかな？君がこんなところに来るのは珍しいな」

「私、カルニストは王に進言致したくてここに参上しました。勇者じゃない異世界人なんて、災いを起こすだけです。この者を死刑にする事を望みます！！」
場がまた騒ぎ始める。
お互い何かを話し合う貴族たち、険しい形相で俺とカルニストを睨んでくる騎士団たち、何食わぬ顔で俺を見てくる魔術師達・・・
　絶対こいつら噛んでるな俺の死刑について。
セシルとルーク王が何かを話してる。

「カルニストよ、本当にマサキが災いを起こすと思ってるのか？少なからず私は、マサキが災いを起こすとは思えない。」
ルーク王は、威嚇をする様に低い声を出しカルニストに言った。

「マサキは、この世界で行ったい何をしたいと思っているのかね？」
いきなり、俺のほうに向いたと思うとそんな事を聞いてきた。
「俺は、この世界を旅でいろんな事を体験して見て行きたいです。
それができればですけど。」
その為には、この国の事や世界の常識などを知らなくてはならない。
「そうか。なら色々と、知らなくてはいけない事が多くあるな。特に行く日は決まってないのだろう？ならば、ここで少し色々と学んで行けば良い。みんなもそれでいいな。」
国王の意見に直ぐに騎士団達は賛成し、貴族達も悩みながら賛成した。唯一、魔術師達は何も言わなかったが。
「賛成多数でいいな。これでマサキについての話し合いは、終わりだ。儀式に移ろう、セシル判別の水晶を持ってきてくれ。」
そう言われてセシルが持ってきたのは、大き目の透明な水晶だった。
「マサキよ、この水晶に手をかざして魔力を流してくれ。」
そう言われて水晶に近づく、手をかざして魔力を流して見ると水晶が強く輝き始めた。
「ほう、勇者ほどではないが魔力はとても多いな。勇者の三分のニぐらいか。水晶から手を離しなさい。
離した後に出た色で使える属性が分かる。」
今度は手を離す、そして出た色は・・・色が出ない。
「これは、どうゆう事なのですか？お父様。」
驚いた顔をしながら、セシルが尋ねる。
「無属性と言う事なんだろう、取り敢えず儀式は終わりだ。私は、

マサキと話したいから皆は下がってくれ。」
そう言って、国王はカルニストを含め下がらせた。
国王と直接話すのか、さっきほどではないが緊張するな。

第八話～O　HA　NA　SHI～（後書き）

どうもです。
作者は、学生なので少し更新が遅れる様になるかもしれません。
一日一話を目指して頑張ります。

次回予告

「試合観戦そして・・・」

誤字脱字があれば、お願いします。

第九話～試合観戦そして・・・～（前書き）

お楽しみください。

第九話～試合観戦そして・・・～

「皆下がった様だな。それでは、マサキとの話を再開するか。セシルから、カルニストが娘のセシルを含めマサキに危害を加えた事をそれを未然に防ぐことができなかった。済まない。」

イヤイヤ、一国の国王がこんなに簡単に謝っちゃいけないでしょ。

「いや、大丈夫ですよ？あ、頭を上げて下さい。」

「そうか。実はマサキに話しておくことがあるのだ。」

話しておくこと？カルニストについてか？

「マサキの立場的にこれからも嫌がらせや襲われることもあるかもしれん。少なくと魔術師連中は、快く思ってないし貴族たちも今は、中立だがいつどうなるかわからない。騎士団に関しては、見方をしてくれると思うから安心してくれ。」

・・・え！

この国の大三勢力陣のうち半分以上が敵ですか。そうですか。勝ち目ないだろ絶対。

「えっと、俺はどうすればいいでしょうか？そんな状況だったら、これから俺も危ないし周りも大変になるのでわ？」

セシル達に迷惑がかかるのだけは、嫌だった。

「別に私たちに迷惑をかけるからって、そんなに慌てなくていいよ。迷惑とか思ってないし、立場上いつだって問題ごとを抱えているからね。」

ルーク王が優しく微笑んだ。

「マサキもつかれただろう。食事をとった後、すぐに休みなさい。それからのことは、また話そう。」
その後、セシル達と食べた食事は美味しかった事は言わなくてもわかるだろう。

――マサキの部屋（客人室）――

「ありがとう、セシル。食事から寝床までなんでもしてもらって、何も持ってないし何も返せないのに。」
サヤ王妃の提案で旅の目処が立つまでここの城で過ごす事になったのだ。
「そんなに恩を感じなくてもいいわよ。私たちは当然の事をしただけ、それとマサキに私から提案があるのだけど。」

「ん、なんだ？俺ができる事なら何でもするぞ。」
セシルが笑ながら訪ねてきた。
「簡単な事よ、魔力の流れは掴めるのよね？ならその魔力を早く流れるようにして眠りなさい。面白い事が起こるから。」
何かよくわからんが、体の中に集中して魔力を速く流れるように流してみる。
「それじゃあお休みーまた明日起こしにくるから。」
おやすーっと言って自分も布団に入る、疲れているからかすぐに寝る事ができた。

――マサキの部屋――
「・・・きろ。起きろー、マサキ朝だよー。」
頭の上からセシルの声がする・・・そう言えば起こしにくるとか言ってたっけ。
でもまだ眠いし体が重いだから、
「後三年寝かせて・・・」
「そんなに待てるか！＜ウォーターボール＞」
セシルのツッコミとともに、頭の上から水の塊が落ちてきた。
「っ！！冷たぁ、なにするんだよ。」
「はい、これ朝ごはんのパンと洗って置いた着替え。速く整えて見にいくわよ。」
「何を？」
「試合よ！」
朝からまた騒がしいな。平穏と言う言葉はないらしい。
とゆうかセシルさん、試合観戦って俺が巻き込まれるフラグですよね？あと、

「体が凄く筋肉痛なんですけど、何でこんな事になってるんだょ。」
身体中が筋肉痛で動かしてないところも筋肉痛だ。

「あ、忘れてた昨日の夜に魔力を速く流れるようにって言ったでしょ。あれは、荒療治だけど手っ取り早く体に魔力を慣れさせるものなのよ。大丈夫？」
大丈夫？じゃ無い、凄く痛くて体が動かない。
「体が動かないんですけど？どうすればいいの？」

こんなのじゃ試合も見にいけない。
「ちょっと待って直してあげるから。＜我らを見守る水の神よ、私の祈りに答えてこのものを救いたまえ。＞
＜ラ・ヒール＞」
自分の周りに光が包んだと思うと、身体中の痛みが取れてゆく。
「すごいなこれ、これも魔法だよね？」
「水の中級魔法よ。筋肉痛ぐらいなら一発で治るわ。早く見に行きましょ、もう半分は過ぎてしまったわ。」
わかったよ，と言いながら渋々服を着替えに行く。
とゆうか、なんで半分も過ぎてるのに起こさなかったんだろう？

「ねえ、もしかしてセシルも寝過ごしたの？」

「な、ナニイッテルノソンナコトナイヨ？」
動揺してるしかもカタコトになってる。

「仕方ないでしょ、私も昨日は走ったり魔法を使ったりしてたんだから。」
着替えて出てくると、足をゲシゲシ蹴られてしまった。
「いたい、痛い分かったから早く行こうよ。」
セシルと一緒に部屋を出る、試合観戦か面倒くさいけど楽しいかもな。

第九話～試合観戦そして・・・～（後書き）

どうもです。
毎日更新とかいいながら、いきなり破りました。
言い訳としては、ＤＡＴＡが飛んで部活の試合が土曜日にあるから、忙しと言うのもあります。

この話は、試合観戦のふりの話です。
次から戦闘描写入ります。

次回予告

「初戦闘」
今度もよろしく！！
誤字脱字があれば、よろしくお願いします。
追記
書き忘れがあったのでかきたしました。すみませんでした。

第十話～初戦闘？～（前書き）

更新遅れました

お楽しみください。

第十話～初戦闘？～

異世界にきてから二日目
――闘技場――
どうも、マサキです。只今、城の横に隣接されている闘技場にきています。
正直、こんなところにいたら目立つし巻き込まれる可能性も高い。
はっきり言って居たくない。
だけど、勇者御一行にも挨拶話しておかなければいけないだろう。

「なあ、どこまで試合が進んでいるんだ？」
さっきから王家専用の場所があるらしいのでついて行く時、闘技場を見たが誰も試合をしてなかった。

「取り敢えず次がラストよ。大体瞬殺だったりするからね。終わるのわ早いのよ。」
次がラストか、なら巻き込まれる心配も無いかな。

「次はレンジャーね。私、レンジャー苦手なのよね。」
へーセシルって苦手なものなさそうなのに意外だ。

「レンジャーってどんなやつ？」
「レンジャーの人は、サイト　オカザキ　って人よ私によく話しかけてくる人なんだけど、貴方の国では皆あんな人なの？」

「いや、どんな人か言ってくれないと流石にわからないよ。」
どんだけ嫌がられてるんだろう。
「あー、ごめん　シズクが言ってたんだけどチューニ病ってゆう病気らしいけど、そんなにひどい病気なの？」

・・・・どういえばいいのだろう。とゆうか、そんなやつに勇者任せていいのか？
「その病気にかかった人にはね、そっとしておくのが一番なんだよ。セシルは、そいつに好かれてるのか？」
いくら厨二病患者でも第二王女だから、好きとゆうわけでも無いだろう。・・・・だぶん、自信は無いけど。

「なんか、私が警備部体のトップって聞いたら飛びついてきて、求婚されちゃったの当然断ったけど。」
多分警備隊に惹かれたんだろう、少なからずセシルは自分の身分なんかでよってくる男なんて嫌いなタイプだろう。
「で、今からそいつの試合が始まると。お、出てきたぞ。」
セシルと話をしていたら、向こうからレーザーアーマーをきた細身の男が現れた。
身長はセシルと同じくらいで顔は細く眼鏡をかけている、言ってしまえば地味だ。

その反対側には、騎士団の鎧をきた青年だった。
持ってる武器は、レンジャーがナイフ　騎士団が両手剣だ。
なんかさっきからレンジャーがチラチラこっちをみてる気がする。

「両者前に、これから神聖な試合を始める。　始め！！」
試合が始まり最初に動いたのは、騎士団の人だったそのままレンジャーの頭から剣を振りかざす。
それに対してレンジャーは、ナイフで受けようとした。
少なくとも俺は、その光景を見てナイフが折れ剣に切り裂かれる姿を予想した。だが、

パキと、乾いた音がなると両手剣のほうが折れた。
そのままレンジャーが騎士団の人の首にナイフを当て試合は、終わ

った。

「え、どうゆう事。普通逆でしょ？」

ナイフの方が力負けをして折れるはずだ体重の掛かった両手剣の一撃に耐えれるはずが無い。

「あれが、伝説の武器で＜武器破壊＞と＜魔力吸収＞を持ったナイフよ。市販で売られてる様な武器では、太刀打ちできないわ。」

要するにチート武器ですかなるほど、勝ち目無いね。

なんか、レンジャーの人と審判が話してる。嫌な予感しかしないんだが。

すると、話をえた様で審判はこう言った。

「レンジャー　サイト　オカザキは、マサキ　シグロに試合を申し込む。」

はい、巻き込まれフラグ回収ありがとうございます。フラグって怖いね。

「ねえ、セシル別にこれって拒否してもかなわないんだよね？」

できる事なら回避したいんだが。

「別にイイけど、こんだけギャラリーが見てるのに貴方は、試合放棄するの？

それに、マサキなら大丈夫だよ。」

いやいや、大丈夫じゃ無いよ勝ち目無いよ。だけどさっきから期待した様な目で見てくる人が多い。

「マサキ様なら必ずその試合を受けて下さるわ、だって私と魔術師達の攻撃を受け切ったのだから。」

げ、カルニストいたのかよ。おかげで逃げ道がなくなってしまった。やっぱり受けなくちゃいけないのか。

「仕方ない。受けますその試合。」

そして俺は、闘技場の中に歩いて行った。

第十話～初戦闘？～（後書き）

どうもです。
部活の試合などで更新が遅れました。
これからは、普通に出せると思います。

中途半端なので二部構成にしました
感想と誤字脱字があれば、よろしくお願いします。

次回予告

初戦闘？

第十一話～初戦闘？～（前書き）

お楽しみください。

ちょっとグロいです

第十一話〜初戦闘？〜

どうもこんにちわ、マサキです。
レンジャーとの試合を受ける事になったので、今闘技場の真ん中にいます。
正直に言おう、とても怖い勝てるわけがない。だって向こうは伝説の武器を持ってきてるんですよ、こっちの持ってるのなんてなんの能力も無い弓と白のリストバンドだけで戦わなくちゃいけない。
取り敢えず、気になった事を聞いてみようと思う。

「ねえ、そのナイフって武器を壊せるらしいけど、人にさしたらどうなるの？」
「人にさしたら身体中の魔力を吸い取りながら細胞を壊していくんだょ。」
はい、シャレになれない事言ってくれてありがとうございます。

「君さぁ、第二王女と一緒にいるんだって？第二王女は僕のものだょ、君みたいな社会のゴミには渡さないよ？」
こいつわざと頭にくる様な事を言ってるのか？セシルの事が好きみたいだけどセシルとゆう一人の人間が好きじゃなくて、セシルの第二王女と警備隊隊長の身分とゆうか位が欲しいだけじゃ無いのか

「なあ、セシルは、嫌がってるぞそれに、お前が欲しいのはセシルじゃ無くて警備隊じゃね？」

「へぇ、君みたいな低脳な人間によく僕の素晴らしい計画が分かったね、警備隊と最強の勇者の僕の力が合わされば世界一の軍隊が作れるのだよ。日本の様な金ばかりかけている軍隊と違ってね、その

ためにあの女は礎になんだょ。」
頭にくる、少なからず俺も厨二的な事を考えないの？って聞かれたら考えるって答えるけど、こいつも場合は厨二とかそうゆう問題じゃねぇ。人間として腐ってる。

「人を道具としか見る事ができないの？厨二君？あと、自衛隊は軍隊じゃ無い小学生でも分かる事だよ。」

「では、これから神聖な試合を始める。始め！！」
審判が掛け声をかけ試合が始まる、最初に動いたのは俺だった。相手はナイフなのでとりあえずバックステップで後ろに下がろうとしたら思った以上に後ろに飛んだ。どうやら身体能力が結構上がっている様だ。
取り敢えず、武器を出すために黒のリストバンドを触るが出し方を聞くのを忘れていた。
（なにやってるんや、俺のアホ～これじゃあ宝の持ち腐れじゃん！）
仕方ないから白のリストバンドで対抗する。

＜我が身を守り敵を切るための剣俺の望みに答えろ＞　　＜ガードソード＞
白のリストバンドと黒のリストバンドから、半透明の剣が現れる。
前回、セシルを守った時に気づいたが俺の魔力が届く範囲ならば俺のイメージしたとうりに作れるらしい。
あとこの剣のモデルは、俺みたいに学生時代を謳歌できなかった少年少女たちが行き着く世界にいる某天使が使ってる武器から拝借したものである。

体に＜絶対防御＞簡易版のシールド（即席で作った）を貼りながらレンジャーに突っ込んでゆく。
（狙うはやつの右腕、出来るだけ攻撃してこちらに攻撃がこない様

にする。）
右手の方の剣を振りかぶる、だが右腕に当たる前に相手のナイフでかき消されてしまった。
そのまま相手が俺に対してナイフによる突きをかましてくる。それを左手の剣で受けるがまたも同じ様に消えてしまった。

（どうなってるんだ、いくら武器破壊とは言え純度百パーセントの魔力の剣を壊す事が出来るのか？）

「ねえ、分かってないなら教えてあげるけどこのナイフには、＜魔力吸収＞も付いてんだよ君のそんなよわっちい剣じゃあ対抗できないよ。」
わざわざ聞いても無いのに話してくれてありがたいやつだ。トリックを聞いても少なからずこの状況は、打開されてはいない。
黒のリストバンドさえ使えればどうにかなるかもしれないのに。魔力を流せばなんか起きないかなっと駄目もとで流すと黒のリストバンドが輝き始めた。

（おお、頭の中にリストバンドにいれた物の情報が流れてくる。あれ、伸縮警棒なんていれた覚えはないぞ。シンカがいれミスったのか？だけどありがたい。）

警棒を強く意識すると、ぽん、と乾いた音とともに目の前に警棒が現れた。
その警棒を手に取り伸ばした状態で警棒の周りに集中する。

（警棒の周りに魔力の層をいくつも作るイメージだそれを大きく槍の様に形を整えて・・・）

「そっちがこないなら、こっちから行くよ？」

レンジャーがのんびりにとこちらへ歩いて来る。
できた槍は俺同じ位の大きさでだいぶ魔力を使ったが完成させれた。
（これがダメならもう魔力がたいして残ってない俺に勝ち目はない！）
腰を大きく切り全力でレンジャーに向かって投げる。
それをつまらなそうにレンジャーは受け止めようとするが、何重にも作った魔力の層は壊れず対して力をいれてなかったレンジャーは、吹っ飛ばされてしまった。
大きな爆音とともに砂煙が上がる、それが無くなった時立っていたのは右肘から手にかけての部分が無くなっているレンジャーの姿だった。
血を大量に出しながら会心の一撃を食らっても壊れてないナイフを拾いこう叫んだ。
「市黒正樹、絶対に殺す。殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺すコロス。」
俺に対して殺すと叫びながら近づいて来るレンジャーには、ただならぬ殺意があった。
「シネ」
ただそれだけを言って、彼の後ろから現れたのは＜ウォーターボール＞＜アイスランス＞＜ロックボール＞などなどが一斉に俺に対して襲いかかってきた。
（勇者は、＜詠唱破棄＞ならぬ＜ノンスペル＞も出来るのかよ。）
俺は、＜絶対防御＞を唱えて防御に徹するが魔力がほとんど無いた

め長くは、持ちそうに無かった。
やばいなと思いつつ攻撃を防いでいたら、目の前から魔力を吸収するあのナイフが飛んできた。
（嘘だろやｍ）
乾いた音と共に＜絶対防御＞が吸い取られ俺は、魔法の波に当たり激しい痛みとともに飛ばされてしまった。

第十一話～初戦闘？～（後書き）

どうもです。
なんか中途半端だなと思う方もいらっしゃる方もいるでしょうが、
今回はここで終わりです。

補足説明としては、レンジャーことオカザキ君は伝説の防具は着てません。
きてたら勝ち目がないですしね。

次はすぐ出します。多分。

感想と誤字脱字があれば、よろしくお願いします。

次回予告

戦闘処理

第十二話～戦闘処理～（前書き）

よろしくお願いします。
いつもより長めかな？

第十二話～戦闘処理～

いたい、体がとても痛い頭を強く打ったらしく頭の中がガンガンする。
（何をしてたのだっけ？確か闘技場に来て・・・・）
そう考えながら目を開ける。太陽の光が眩しいなんでこんな所で寝転がっているんだろう？
（たしか、試合をしててレンジャーの腕をぶっ飛ばしたら魔法が雨の様に飛んで来てぶっ飛ばされだったんだっけ？）
頭を強く打ったせいか、ただでさえ冴えない頭が余計冴えてない。
だが、現実を見せるかの様にソレは降って来た。
俺が転げているすぐ横に全長一m程の氷の矢がそこにあった。
（うん、目を覚まさせてくれてありがとう。逃げないとやばいね、早く体を動かさなきゃ。・・・・あれ？）
此処は危険なので体を動かそうと思ったが何故か立てない。具体的には、左足の感覚が無い。
恐る恐る上半身だけ上げ様子を見てみる・・・・左足の膝からしたが無い。
（冗談じゃないなんで左足が無いんだよ。ヤバイこのままだと本当にヤバイ。）

立てないならマトモに相手の攻撃をよけることが出来ない、しかもさっきの攻撃のせいで傷口から大量の血が出てきている。
そして自分が使った魔法のせいで自分の魔力も余り残ってない。この状況で生き残れているのは、ネックレスと＜絶対防御＞の代わりとして貼ってあった別のシールドのおかげだろう、此方は吸い取られなかったらしい。
相手は、頭に血が上っているらしくまともな狙いを付けずに飛ばし

て来ているから当たってないが、次当たってしまったら後は無いだろう。

（残った魔力を全てリストバンドに流すそしてそれを＜形状変化＞で球の形にし＜形状固定＞をした後量産する。約三十個、コレを俺に対して飛んでくる危険な物だけ撃ち落とす。そしたらなんとか持つんじゃないのか。）

正直無謀な賭けだがこれしか今俺に出来ることが無い。あいつが倒れるか審判や誰かを止めてくれるのを祈るだけだ。

いくつか飛んで来たのでそれを撃ち落としながらレンジャーの姿を見てみる。

先っから同じ場所で呪文を唱えてる様でナイフも取りに行ってない。

俺がぶっ飛ばした右肘を見るが血を流していなかった。

右肘があった所は、強い光を放ちながらての輪郭を整えていっている。

（勇者のチートか回復魔法だなあいつは、攻撃に必死の様だし第三者からの回復か？）

勇者のチートと思えたが直感的にそれは違うと思った。

闘技場の中を見渡して見る騎士団や今回魔術師達は、何もしていない様だ。

貴族達を今度は探す、決して地味とは言えない様な服装をしていたためすぐに見つけることができた。

（ビンゴ！やっぱり第三者からの回復だ。）

貴族達を見ると膝まずき祈りを捧げるように唱えている貴族達を見つけることをできた。

近ければ妨害するのだが、ギリギリ見える程度の距離なので今の俺では魔法を飛ばすことが出来なかった。

球数も減ってゆき後十個近くになってしまった。

（このままでは勝ち目が無い、どうする？・・・・あり？）

どうするか頭を回転させていたらだんだん視界がぼやけてきた。
血を流しすぎたと思った瞬間気絶してしまった。

視点変更――セシル　セフィルス―――

マサキが闘技場でレンジャーの人と戦っているのをハラハラしながらずっと真剣に見ていた。
マサキがでっかい槍を投げてそれでレンジャー致命傷をおったときついガッツポーズをしてしまったのは、仕方ないと思う。うん、仕方ない。
だけど、レンジャーが突然叫んだと思うと詠唱無しで魔法を飛ばした時はとても驚いてしまった。確かに魔法を詠唱せずに放つ技術がないわけでは無いけどあれだけの量を飛ばせる勇者の魔力の量が凄かった。
前衛職で魔力量が少ないはずのレンジャーがこれだけ撃てるのだバッファーとかは、どれだけあるのだろと興味と恐れを感じたのは誰も責めることが出来ないだろう。
一応、私も魔術師のはしくれで警備隊の隊長なのだ圧倒的な力に反応してしまうのは仕方ないだろう。

そして、マサキのシールドが破れた時凄く不安になってしまった。
魔術師達の攻撃を受け切り私を守り切ってくれたのだそのマサギが

やられるはずが無いと。
だけど、マサキの左足の膝からしたがなくなっていた。
私は、後悔した。
私が大丈夫と言わなければ無理に連れてこなければこんなことにならなかったのに。

私が後悔している間にもマサキは魔法の球を作り出し飛んでくる魔法を撃ち落していた。
よかった、少なからずまだ生きているし戦うだけの力は残ってたようだ。
だけどあのまま放っておけば確実に死んでしまうだろう。
レンジャーの方見る、さっきまで無かった手がある！
よく見ると、魔法で治されているようだ。だけど誰が？勇者には自分を回復させているような様子は無い。あたりを探る、最初に魔術師達を疑ったが今回は何もしてないらしい。興味深そうに試合を見ている。貴族達は・・・・いた！祈っている様にみえるが魔法を使っている。無くした体のパーツを治す魔術は有るにはあるが、高位魔法の中のトップレベルの魔法だ普通の魔術師が使える様な魔術じゃないのに。

どうするか迷っていると、母様が声をかけてきた。
「セシルは、今すぐクーちゃんを呼んで。貴方は勇者の足止めをして私は、マサキを回復させるわ。」
急いでクーを呼んでみんなを乗せてマサキの元へ向かう。
「私は、オカザキ様を止めておく。セシルとサヤは今すぐクーにマサキを乗せて医療室に。急げ！」
此処は、父様に任せて急いでクーに載せる。そのまま医療室に行く様にクー命令した。
お願い助かって。

第十二話～戦闘処理～（後書き）

どうもです。
なんか急展開ですね。
マサキの状態はＤｅ○　ｄＳｐａｃｅ２の外伝のラスト等へんからきています。

テストで忙しいですが頑張ります。

誤字脱字があれば、教えてください
感想も受け付けてます。

次回予告

「ヒーラー　」

よろしくお願いします。

第十三話　～ヒーラー　～（前書き）

更新遅れました。
短めかも。

第十三話　～ヒーラー　～

――医療室――

城の一部にある医療室にはすぐにたどり着くことができた。まあ、闘技場とかで怪我をする人はいっぱいいるから近くに立ってるのは当たり前なんだけどね。

クーで医療室に突っ込むわけにいかないから、テラスに降りて空いてなかった窓を蹴り飛ばして中に入った。医者達は驚いてたけど、偶然いた警備隊の仲間はまたかみたいな反応された。
こんなこと普段しませんよ？私は普通の女の子ですよ？

ベットの一つを借りてそこにマサキを寝かす。
止血はしたが、応急処置なのでいつまたどうなるかわからなかった。

「私が＜リターン＞で左足を直すからセシルは身体中の傷を直して。」
＜リターン＞は、回復魔法のなかでも上位ランクに当てはまる魔法だ。しかも、普通は優秀な魔術師数人で回復させる大魔法と言われている。それを母様一人でやろうと言ってる。
確かに母様は、かつて最強の回復魔法師と言われた事もある人だ。だけと、十六年前に魔法が使う事が困難になったと聞かせられている。

「私の事は気にしなくていいわ少し体調が崩れるだけだから。早くしないと普通の人より強いって言ったて死んでしまうわ。」
そうだ、私が動かなくてはマサキが死んでしまう。
マサキの手を握りながら＜探査＞の魔法をマサキの体に流す。

回復魔法は基本回復させる相手に近いほうが回復の効率がいいとされている。

血管の一部損傷
臓器の損傷
急激な体からの血液の流失

これが＜探査＞で得た結果だった。
ちなみにこの＜探査＞の魔法は先代の勇者が作った魔法の一つである。
その魔法を勇者に同行した術師の一人がある程度まで簡単な魔法に作り変えている。
＜探査＞は、医療用と戦闘用の二つがあるが今セシルが使ってるのは医療用のほうだ。

血を流しすぎている。正直危ない。
取り敢えず、治癒魔法で回復速度を早めて回復させなきゃ。
治癒魔法＜リジェ＞を使い回復速度を早めた後、回復魔法＜ラ・ヒール＞で治療を始める。

まず、出血が起こってる血管の修復から始めるその後臓器を治す作業に移る。

回復魔法を使って数分血管は修復でき、臓器もほとんど治す事ができた。後は、小さな傷などを治していくだけで終了だ。
このままならいけるわと、考えていた。
そんな時自分の＜探査＞から新たな情報が流れてきた。

心肺停止

多分、出血多量のショック症状と思うけど早くどうにかしなきゃ。
回復魔法の欠点として体の傷は治せても心肺停止や呼吸困難などは治せない事がある。
冒険者やモンスターとのパーティーによる戦闘をした事がある人にはメジャーな事例だが、
回復魔法を担当していた人がパーティーの一人が心肺停止が起きているのに気づく事が出来ずに助けれなかったとゆう事もあるぐらいだ。

探査魔法をかけてたからよかったけど、それでもこの状態はヤバイ。
さっきから心臓マッサージをしているが中々心臓がうごいてくれない。
近くにいた医師が気道の確保や人工呼吸をしてくれているが息を吹き返す兆しも無い。
もうすぐ一分が経とうとしてる時、後ろから可愛らしい聞き覚えのある声が聞こえた。

「何をしてるの？」
白いローブを着た勇者の中の一人、ヒーラーを務める。
空野（そらの）　雫（しずく）だった。

「お願いマサキを助けるのを手伝って！」

第十三話　～ヒーラー　～（後書き）

どうもです。

テストや資格試験の勉強や
部活の（弓道）の審査等で更新が滞ってました。

次はすぐ出します。

追記
第十三話を十四話と書いてました
すみません

誤字脱字があれば、教えていただけたら幸いです

第十四話～回復と戦闘と～（前書き）

すぐに出すとか言って出せなかった

最初は、セシル視点です。

第十四話～回復と戦闘と～

私が呼びかけるとゆっくりとこちらに歩いてきた。
あいからわず仕草一つ一つがかわいいと思えてしまう。

彼女は、シズク　ソラノ　勇者の一人として選ばれヒーラーの座を与えられた少女。
実際は私よりとても小さくて保護欲を掻き立てられるような幼い顔立ち体がちっさいためなにやって必死そうで可愛らしい。
ハッ！こんな事考えてる場合じゃ無かった。

「ねえ、マサキを助ける方法を知らない？心肺停止になってから戻らないの。」
心臓マッサージをしながらシズクに聞く。
シズクがいた国では、医療がとても発達していたらしい。それでもシズクが知ってるとは限らないが。

「よくわからないけど、ちょっと試してみる。」
シズクはマサキの前に立つと手から青白い光が出てきた。
魔法にはそれぞれの属性によって魔力の色が変わる。
無属性なら透明、水属性なら水色、火属性なら赤、風属性なら緑、土属性なら茶色と言ったところだ。
水，土、風、火の四大属性の他に光、闇、雷がある。

雷は光や闇ほどじゃ無いが持ち主が少ない属性だ。
手がより明るく光っている、魔力を貯めてるのはわかるけど行ったい何に使うのだろう。

「こうすれば、それ！」
シズクが魔力を貯めた手をあげたと思ったら、それをマサキの胸に叩きつけた！
「へ？　　えぇぇぇなにやってるの！！」
マサキの体はビクンっと跳ね上がり叩かれていたところは黒く焦げていた。
「　　まだ、心肺停止？」
「え、うん。まだ止まってる。」
シズクに言われて慌てて確かめるがまだ心臓は止まったままだった。
「なら、もう一度。　　それ！」
もう一度、マサキの体が跳ね上がるその時私の＜探査＞から心肺停止の表示は消えていた。

「・・・・・」
声も出ない。あんなやり方で治すなんて。
雷の魔法自体が少ないからメジャーな蘇生方法にはならないけど、これだけでも生存率がかなり上がると思う。
これが勇者の力か凄いね。

私が驚いていると、マサキの焦げた皮膚の部分を治し終わったらしいシズクはこちらに歩いてきた。

「凄いね、サヤ王妃はあんな魔法あるの？」
こんな事いってはいけないけど完全に母様の事を忘れていました。
心のなかで謝罪しつつ、母様に目を向けると異様な光景だった。

綺麗な水色の髪は光っており、薄っすらと白い羽が見えるのが分かる。
＜リターン＞にはこんな効果は無かった筈だけど。
そんな事を私が思っているとシズクが私の服の裾を引っ張り話しか

けてきた。

「で、この人誰？」

そうか、シズクはまだあった事無いだったわね。

とゆうか、知らずに助けてくれたんだ。

「この人は、マサキ　シグロって言うの貴方の世界の名前に変えたら市黒正樹ってらしいけどね。とゆうか、シズクって闘技場にいるんじゃ無かったっけ？」

勇者達は試合で闘技場にいる筈だった、それは後衛職のヒーラーもおんなじだ。

「わたしは・・・兵士の人に睨まれたら気絶しちゃって。」

睨まれただけで気絶するって・・・多分、睨んだわけじゃあ無いと思うけどね相手が勇者だから真剣な目をしてやってたろうんだろうね。

そんな感じの話をしていると母様が魔法を終えたらしく、こちらに話しかけてきた。

「終わったわ。血がだいぶ抜けてるし魔力もろくに残ってないけど多分大丈夫だわ。」

マサキの左足をみると、綺麗に元に戻っていた。ありがとうと告げようと思い母様に向くと母様は床に倒れていた。

「母様！」

急いで駆け寄るが対した怪我もしてない、じゃあなんで倒れたの？

ーーーー闘技場ーーー

―――視点変更　　ルーク　セフィルス―――

時は、サヤ王妃が倒れる少し前に戻る。

「どうか、怒りを収めてくれませんかなオカザキ様」
セシル達を見送った後、私はオカザキ様の説得をしていた。
「殺す、絶対に殺す。」
うん、無理見たいですね。正直駄目もとでしたが、やっぱりダメでした。
正直、勇者と戦いたくは無い。重要な戦力だしこの世界の未来が掛かっている子供達だから怪我などはさせたくは無い。

「一国の王如きが俺に歯向かうなっ！」
オカザキ様の声と共に、＜アイスランス＞などの魔法が展開されていく。
こんなに魔力があるとは思わなかった。もしかしたら誰かが魔力を供給してるかもしれないが、そんな魔法を使えるのは土属性の魔法のかなり上位の魔法の筈だ。そう使えるものはいないだろう。
飛んでくる魔法に対して空を仰ぐかのように目の前を手で仰ぐ、すると飛んできた魔法は跡形も無く燃えてしまった。

「これでも昔は「紅蓮の王」と呼ばれた事もあるんだがな。」
「紅蓮の王」の由来はルーク王が純粋魔導師である事からできている。
この世界では、普通一人二種類程の魔力を持って生まれてくる。
だが、たまにたった一種類しか持たずに生まれてくる者もいる。そんな人たちは、自分が持っている属性に長けとても強い魔法を覚え使えるとされている。そんな魔術師を純粋魔導師と呼んでいる。

デメリットとしてはその属性しか使えないので、複合魔法や幅広い魔法が使えないと言う弱点もある。
かつて呼ばれていた今思えば少し恥ずかしい二つ名を思い出しながら腰に付けている剣を引き抜く。
刃の部分はほんのり赤くシンプルな両手剣を取り出し魔力を込めながら地面に突き刺す。
この剣は、火の竜「レッドドラゴン」の素材からできているがこれも立派な魔剣である。

すると、レンジャーの周りから青白い火が吹き出し何かが割れる音と共にオカザキはその場で倒れてしまった。
「やっぱり、誰かから魔力を供給させていたようだな。だがいったいだれがそんな事を？」
そんな事を思いながら闘技場を走って出ようとする。
目指すは医療室、愛しの妻がきっと倒れてセシルが慌てているだろう。
走るスピードを上げながらルーク王は闘技場を後にした。

第十四話～回復と戦闘と～（後書き）

どうもです。

文章がめちゃくちゃだなと思いつつ今日書いてます。

ルーク王強いですね。とゆうか強すぎる。

次回予告

「第一王女」

誤字脱字があれば、教えてください。

ご意見ご感想もまってます。

第十五話～第一王女～（前書き）

できました。

第十五話～第一王女～

ーーーマサキの部屋ーーー
眩しい光を浴びて目を開ける。
うー、体が重い。なにしてたっけ？
セシルと試合観戦してオカザキってやつと戦って足吹っ飛ばされて気絶して。
そっか、死んだんだ。きっとここは死後の世界なんだ二度目だな。
出来れば今度神様に会うのだったら美人な神様がいいなー
シンカみたいな神様はめんどくさいし。
そんな事を思いながら体を起き上がる。
なんか、見た事がある様な内装だな。

「シグロ様、体の調子は大丈夫ですか？」
俺の目の前に現れたのは金色の髪に紫色の目した綺麗な女性だった。
天使は綺麗な人がいいとは思ってたが本当にいるとは。
とゆうか、天国なのになんで体の心配をするんだ？

「すみません、貴方は誰ですか？」
「私は、セフィルス国の第一王女で　メリーセフィルスです。」
セフィルス国って・・まさか生きてたのの俺！
よく見たら前日使っていた部屋にそっくりだとゆうか使ってた部屋だ。
「俺って、生きてるのですか？」
てっきり死んだと思ってた、自分で言うのもなんだけどな。
「ええ、生きてますよ。ソロソロセシルも来る頃だと思います。さ

っきメイドに呼ばせに行きましたから。」
メリー王女がそう言った瞬間大きな音と共に、扉を蹴破ってセシルが現れた。

「マサキ！目が覚めたの？良かった本当に死んだのかと思ったんだから。」
セシルが安心した様な顔をして此方に近づいて来る。
いや、心配してくれるのは嬉しいんだけどさ、何故に扉を蹴破ったし。

「セシル、心配してたのは分かるし急いできたのも分かるだからと言って扉を蹴り飛ばすのは良く無いわ。」
メリー王女がお姉さんらしくセシルに説教している。お姉さんみたいだまぁ、お姉さんなんだけどね。
「貴方はいっつもすぐ物を壊すんだから今月の'' セシルが壊した'' 物はどうするの？給料から修繕費を引いておきますからね。」
「そんな～私はそんなに壊してないし犯人逮捕に仕方なかった事なんだよー。」
そんな言い訳は聞きませんといいながらメモをとっている。仲がいいんだな、それより俺忘れられてないか？

「あのさセシル、俺って何時間寝てた？あと、俺の足ってなんで治ってるの？」
さっき俺の足を確認して見たが綺麗に元に戻っていた、少し違和感があるがなんともない範囲だろう。
「三日間寝ていたわ、足に関しては母様が治してくれたわ。」
三日間も寝てたのか、そう言われるとお腹が空いてきた。早く何かを口にしたい。
「済まないけど、ごはんくれない？とっても腹が減った。」
腹が減っては戦は出来ないし、何より体の調子を元に戻すためにも

必要だしね。
「分かったわすぐに用意させる。それと、食べ終わったらいっしょに母様のとこに来てくれないかしら話したい事があるらしいの。」
分かったと言ったら、料理を持ってくるらしく部屋から出ていった。
「それじゃあ私も仕事に戻るわね、一ヶ月居なかったから仕事が溜まってるの。それじゃあ今夜のパーティーで会いましょ。」
そういいながら、メリーも出ていった。
パーティーってなんぞ？

そのあと、セシルが持って来た料理を何度もお代わりした事は用意に想像できる事だと思う。

第十五話～第一王女～（後書き）

どうもです。
審査が日曜にあるので短いですが、出しました。

誤字脱字があれば、よろしくお願いします。
感想等もくれたら嬉しいです。

次回予告

「十六年前？」

第十六話〜十六年前？〜（前書き）

更新遅くなりました。
すみません。

第十六話～十六年前？～

マサキの部屋
「マサキ着替えをここにおいとくね。」
どうもです、マサキだよー今は自分の部屋でゆっくりごはんを食べてるんだぜ。米が無いと聞いた時は絶望したけど、このフランスパンもどきが美味しいから許す。
「もぐも、ほうもぐもぐも（分かった、そこに置いてて）」

「はいはい、口に食べ物居れながらしゃべらないの。」
呆れられながら言われてしまった。仕方ないじゃ無いお腹空いてるのだもの。
「もぐもぐ、ごっくん。ふーお腹いっぱい、これがその服。」
セシルから手渡されたのはなんとジーパンとTシャツであった。
いや、Tシャツがあるのは分かるけどなんでジーパンがあるんだよ。
いや、ジーンズと言った方がいいか。俺的にはジーンズは好きなのでこれ程嬉しい事はないのだが・・
「王妃に会いにいくのにジーンズじゃダメじゃ無い？」
少なくとも国のトップの妻に会いに服じゃあ無いと思う、この世界ではそれで良いのだろうか？
「私の友人だからいいわよ、母様も気にしないしね。」
そう言うセシルもラフなかっこだった、本当に良いんだよね？
一抹の不安を抱えながら着替え様とするとまだそこにセシルがいた。
「あの、セシルさん？なんでまだ居るんですか？着替えるんだけど？」
下着も変えようと思っているので正直女の子がそばにいると恥ずかしい。
とゆうかなんでそんなに不思議そうな顔で見つめるんですかね！

「別に着替えぐらいなら私は警備隊にいるからよく見かけるわよ。気にしないわ。」
いやいやいや、俺が気にするんだよ。一国の王女がそんなので良いのか？会ってまだ二日目だけどまだ王女だって思えてこないぞ。
「流石に警備隊でも下着とか着替えるときは違う部屋でしょ。」
すると、セシルは少し顔を赤くしてゴメンといって部屋に出ていった。
色んな意味でずれてる気がするここの人たち。

———サヤ王妃の部屋———
所変わってここは王妃の部屋だ。俺が使わせてもらっている所より内装が豪華で少し広い。
え、なんでここまで来た道のりの話しが無いって？
話す程対した事が無かったんだよね、しいて言うなら城のメイドたちに品定めをする様な目で見られた事かな正直怖かった。すごい形相で見て来るんだよね、そんなに珍しいかな俺。
「わざわざここまで来てくださってありがとう。本当は私から行くべきなのにね。」

「そんな事ないですよ、足を治してもらったのは僕の方ですし」
俺の足を治してくれた事はセシルから聞いていた。だけど倒れている事は聞いてなかった。
「もしかして俺のせいで倒れてしまったのですか？」

「そんな事無いわ、わたしが治したいと思ったから治しただけだから。」
サヤ王妃はゆっくりと微笑んで話してくれた。
「さて、そろそろ本題に入ろうかしらマサキくんには分からないかもしれないけどセシルなら分かるじゃないのかしら。」
サヤ王妃がて渡したのは白い鳥の羽の様な物だった。
触ったとき大きな魔力が入っているのは分かるがこれがなんなのかわ分からない。
「ちょっとかして。この羽って幻獣の羽？幻獣の魔力を感じる。」

「そうよ、それは幻獣の羽そして私の羽でもあるの。」
どうゆう事だ？なんか俺だけ着いていけて無いんだけど。
「十六年前、セシルが生まれた時の事よ。本当はもっとセシルが大人になってから話そうと思ってたんだけど、少し長いけど聞いてくれる？私が幻獣化した話しの事を」

――とある話し――
「ねえ、セシルこのジーンズってなんでこの世界にあるの？」
前の世界ではたくさんあったが異世界に有るとは思わなかった。
「それは、前の勇者たちが持って来た技術で坑道で働く人なんかに人気があるのよ。城下町に行ったら、勇者の子孫がジーンズ作りをしてるわよ。少し高いけどね。」
ぜひとも行ってみたいな。そう思いながら城の廊下を歩いていた。

第十六話～十六年前？～（後書き）

どうもです。
早速ですがｖかにｖさんありがとをございます。
参考にさせていただきます。
お気に入りも五十件を超えてとても作者は、喜んでいます。

とある話しは何故この世界にジーンズがある話しについてです。
もしかしたら、他にも色んな話しが有るかもしれませんね。
ところどころで書いて行きます。
ご感想ご意見お待ちしてます。

次回予告
「十六年前？」

第十七話～十六年前？～（前書き）

遅くなってすみません。

第十七話〜十六年前？〜

――サヤ王妃の部屋――
サヤ王妃の部屋に呼ばれて来たんだけど。
なんと、サヤ王妃は幻獣化を十六年前にしたらしい。うん、幻獣化ってなんぞ？

「すみません幻獣化って何ですか？」
なんせ俺は魔法のまの字も分からない人だからな、幻獣化とか言われてもよく分からないのですよ。

「ごめんなさい、取り敢えず幻獣とついでに精霊の話しもしてしまいましょうか。」
よろしくお願いしますと言って、メイドさんが持ってきた椅子をもらう。いや、だからジロジロ見ないでなんか怖いから。

「さてと、まず幻獣からね。幻獣と精霊にの違いはいろいろと有るけど、一番大きな所は契約だと言われてるのよ。」

「まず幻獣は精霊と違って幻獣使いの親からの継承と天からの祝福しかないの。親からの継承は私とセシルみたいな物ね継承と言っても私自身の幻獣が居なくなるわけでは無いわ。確立的に高いと言われてるだけよ。」

「その天からしたらどちらとも天の祝福ね、天の祝福はごく稀に生まれた時に体の中に幻獣がいてその幻獣と契約するのよ。幻獣は上位の世界から来てると言われてるから天の祝福ってゆうのよ。」

さっきから全く喋ってないけど寝てたわけでは無いよ？真剣に聞いてたんだよ！
でも、これで俺が幻獣が使える事が出来る可能性がなくなったわけだが。天性の物なんだな。ちょっと憧れてたんだけどな。

「精霊は神聖な場所もとい魔力の質が良くて量が多いとこに住んでいるわそこで精霊たちに好かれたら契約する事ができるわ。過去にも勇者が契約したらしいからマサキの契約する事ができるわ。」
そんな物欲しそうな顔をしていたのか俺、少し自重しなくちゃな。
ふと思ってセシルを見てみるとずっと貰った羽を見ているそんなに価値がある物なのだろうか？
魔力が入っているぐらいしか俺には分からなかったけど。

「幻獣化についてだけど、自分の中に幻獣を入れる事よ。自分の器にまるごととといれる感覚かしら。」

「ちょっと待ってください、幻獣って最初からいないのですか。」
さっき中にいるとか言っていたけど。
「さっき中にいるって言ったけど正確には魂が幻獣とつながっているの。それを使って上位の世界から呼んで出すのが幻獣術よ。」

「つまり、その幻獣を上位の世界から自分の体に入れ込むもとい融合みたいな物ですか？」
よく分からないがとゆうか、微妙にうやむやな気がする。

「まぁそんな感じよ。方法としては古くから伝わっているけどどうして幻獣かできるか分かってないの。」
そんな時今まで喋ってなかったセシルがサヤ王妃に質問を投げかけて来た。

「幻獣化には大きなリスクを伴って死ぬ人もいると聞かされているわ。でもなんで死ぬのですか？」
「ええ、いるわ。魔力の質と魔力の量に耐えきれなくてしんでしまうわ。」
「さてと、脱線してしまったけど十六年前の話しをしましょうか。」

第十七話～十六年前？～（後書き）

どうもです。
明日にもう一話出せる様に頑張ります

次回予告
十六年前？

十六年前の話しは次で終わりです。

第十八話～十六年前？～（前書き）

体育祭等で遅くなりました。

多分長め。

第十八話〜十六年前？〜

どうもマサキです。
前回に引き継き王妃の部屋からお伝えします。
幻獣の説明などが終わり十六年前の話に入るみたいです。
今気づいたことだけどさ十六年前ってセシルが生まれたときじゃない？俺と同い年なんだし。

「今から十六年前、セシルが生まれる時だったわ。十六年前に前の魔王に従えていた四天王って言われる幹部級の魔物が居たの、魔王自体はだいぶ前に死んだけどその魔物だけは見つからなかった。最初は各国も全力を込めて探したわ、けどどこを探しても見つからなった。そうなると自殺したや元から死んでいたという意見が強くなってどこも探さなくなっていた。魔軍（魔王軍のこと）との戦いでどこの国もボロボロだったから普及作業が急がれたわ、この国もね。そして時が流れてセシルが産まれる直前になってこの国に魔軍が攻めてきたわ。」
ふう、と息を吐きながら話を再開させる。

「最初は魔王が復活したと思ったわ、だけどその魔軍に四天王の魔物が居たの。
長い時間力を蓄えてきたのね異常なほどの魔物がいたわ。」

視点変更ーサヤ・セフィルスー
場面変更ーセフィルス城中庭ー
時代変更ー十六年前ー

「ルーク！！大丈夫？」
やっと見つけた私の最愛の夫でありこの国の王であるルーク王がそこにいた。
もう魔軍と戦った後らしく体中に返り血がついていた。

「大丈夫？じゃ無いよ！なんで君が来てるんだ！早く逃げなさい。」

「心配しなくてもいいわそれにあなたも怪我をしてるでしょ。＜ラウ・ヒール＞」
私が回復魔法を唱えると体が楽になったらしく、さっきまでこわばっていた顔がいつもの様な顔に戻っていた。

「回復魔法をありがとう。だけど今すぐ戻るんだ君は王妃だし今は自分一人の命じゃ無いんだぞ。」
そういいながら近づいて来て私の頭とお腹を撫でる、今私のお腹の中には新たな命が宿っていた。二番目に生まれる私たちの子供。名前はもう決めていてセシルと決めていた。セシルなら男の子でも女

の子でも通用する名前だ　。
「ゴメンね、気になって来ちゃった。」
来ちゃったって、ハァ、と言う声が聞こえた気がするがきっと幻聴だろう。
「いいから帰りなさい、お婆様も出産は近いと言ってたんだろう？
それにイヤな気配がする。」
確かにイヤな気配がするのは私も知っていた、むしろそれを感じて来たのだから。あと、お婆様とは代々セフィロス王国の助産婦をしている人で実はまだ若い助産婦長の人の事を呼ぶ習慣らしい。
「大丈夫よ、私はこれでも王妃になるまでは回復魔導師として戦っていたのだから、それに幻獣と精霊もついているのよ、そう簡単にやられはしないわ。」
私は庶民のでなのだか魔力の多さと天の祝福で得た幻獣の能力を認められて王国の魔導師部隊の回復部に所属してのだ。えっへん。
「だからと言って・・・・サヤ下がっていなさい。」
そこに現れたのは黒い服を来た若い男性だった。もしこの場にマサキがいればその服装をライダースーツの様だと表してただろう。
「貴様がこの国の王だな悪いが死んでもらおう。我が魔王様のために。」

「悪いが死んでやる事は出来ないんだかな。」
そういいながら腰につけていた両手剣を抜き払った。
「魔剣か、なかなか良いの持っている。」

「悪いが喋っている暇は無いんだ。俺としては荒事は嫌なんだがこれでも一国の王なんでな。」
ルークはそう言い放つと地面を蹴りあっという間に魔物の懐まで来ていた。
「名も名乗らせず攻撃してくるとわな。ナルカだ覚えておくと良い。」

四天王もといナルカがそう言うと自分の影から黒い盾が現れた。
魔物には物の影を操る能力を持っているのがいる。俗に影術と言われる物で影あればどこからでもでせるので厄介な魔法だ。
「邪魔だ＜ホワイト・フレア＞」
ルークが白い炎を纏った剣に盾に叩きつけると影ごと周りの物を吹き飛ばしていた。
「危ない！＜ウォーターシールド＞」
ルークは本気でぶつかっているらしい。おかけで私のとこまで魔法の余波が飛んで来た。守る事には成功したが。巻き込まれるとシャレにらない。
「白炎聞いた事があります。純粋魔導師でオリジナルの白い炎を使う王がいると。あなたでしたのですね。」
飛んでくる白炎を影で防ぎながらルークにも攻撃を試みようとするが全て剣で防がれていた。
白炎は結構有名な魔法で白炎ができた話しにはサヤ王妃が深く関わっているがそれは別のお話。

「おしゃべりをしている暇があるのか？＜ブレイド＞」
白炎を纏った剣がナルカの腕を切り落とす。
直前に盾を纏ったらしいが盾ごと切り裂く威力がその剣にはあった。
「！！私は四天王の中でも一番弱い、それ故に生き残ったとも言えるが残念ながらもう長くないのでね、最後に特攻をさせて貰ったのだよ。」
長くない？それはどうゆうことでしょう？
「長く無いとゆうのはどうゆうことだ？」

「そのまんまの意味ですよ。私の命は長く無い、理由は言う必要はありませんが私はこの世界を気に入っているのでね教えてあげましょう。新しい魔王が生まれると言う意味ですよ。そうなったら、古いのは用済みですから。」

！！なんとゆうことでしょう。今とんでもない事を聞いてしまいました。また魔王が生まれるなんて・・・過去にも何体も生まれていますが、少し早すぎる様な気がしますね。

「すぐに生まれるわけでは無いがな。
さてと、この程度の魔物の群れだすぐにやられているだろう。
最後に一矢報いさせて貰おうか。」
そう言うと、ナルカの影から大きな魔力が溢れ始めた。
これはやばいですね、すぐに私は幻獣と精霊を呼ぶ準備をする。だが

「遅いです。」
私めがけて影から黒い塊が飛んで来た。しまった。避けきれない！
呪文を唱えながら目を閉じる。
だが、私に攻撃が届く事は無かった。

「自分の身を呈して妻を守りましたか・・・最後に良い物を見せてもらいましたよ。」
そう言うとナルカその場で倒れて動かなくなってしまいました。
私の目の前には剣の腹で攻撃を守ったルークの姿がありました。その体は全身真っ黒で煙をあげた状態で立ったまま動かなくなっていました。
「待っていて、すぐ治すから。
＜ラゥ・ヒール＞ッ嘘弾かれた。」
回復魔法を掛けると魔法がディスペルをかけられた様に弾かれてしまった。考えられるとしたら・・・呪い？
「＜聖なる水の輝きを持ってこの物の呪いを解きたまえ＞＜ラゥ・ライト＞」
呪いを解く魔法をかけてみたがヒールの時の様に弾かれて消えてしまった。
考えろ、考えろ私。今自分が使える最高の解呪魔法を使ったが呪い

は消えなかったこのままだとルークは死んでしまう。そうだガーディを呼ぼう。
ガーディは私の幻獣で風の属性を持っている。
私が呪文を唱えると天使の様な少女が現れた。天使が違う所は羽が六本生えている所だ。天使なんてみたことないけど。
「サヤ大丈夫？何があったの？」
透き通る様な声で話しかけてきたガーディに今までの事を全部話した。
「多分、今サヤが使える魔法じゃあ解呪は出来ないと思う。私も水の属性じゃ無いから解呪は出来ないし・・・」
ガーディも出来ないらしい試しに精霊のクルーも呼んだが出来ないらしいこちらは火の属性だ。
このままだとルークが死んでしまうどうすればいい？その事を考えてる時に一つの案が浮かんだ。
「ねえ、もしガーディとわたしが幻獣化して魔力の底上げをしたら大丈夫かしら？」
「！！出来ない事は無いけど・・・だけどリスクは大きいわ助かる保証も無いわ」
それで良い私は腰から短剣を取り出すと指を薄く切りでてきた血に魔力を込めてクルーの額につけた。
「あなたは今からメリーの精霊よあの子を守ってあげて。」
そう言うとクルーは一目散にメリーがいる所まで走って行った。
「さてと、幻獣化の儀式を始めますか。」
「本当に良いの？もしかしたらあなたの命じゃなくて一緒にお腹の子まで死ぬかもしれないのよ？」
そんなガーディの問いに私は笑って答えた。
「大丈夫よ、ルークも助けてこの子もちゃんと生む。私だって生き残ってみせる。母親を舐めないで。」

――視点継続　サヤセフィルス――

――場所変更サヤ王妃の部屋――

――時代変更　　現在――

「私の話しはこんな所よ」
私か話し終えるて紅茶を飲む
やっぱ、ルークが作った葉でいれた紅茶は美味しい。

「私が受けた代償は、一生子供が生まれない体になった事ともう知ってると思うけど魔法が使えなくなったわ。正確には使うと体調が悪くなるのよ。」

「話しは変わるけど、マサキくんはこれからどうするの？」
マサキくんは少し考た様子で。
「この前も話したとおり、旅をしようかと。そのために色々と教えてもらいたい事があります。」
ちゃんと考える子らしい、旅をするにも常識やある程度の技量が無ければ盗賊に襲われて終わりだ。
「それじゃ色々教える代わりに警備隊の仕事手伝わない？」
私の発言を聞いた途端セシルとマサキくんは驚いた様な顔になる。
そんなに驚く事かなぁ？
「ちゃんと給料も出すわ。教えてて貰って、給料貰って、技量とかも積める一石三鳥じゃ無いかしら？」
そう言うとすぐに有難うございます。やらせていただきますと言ってくれた。多分元から何かするつもりだったのだろう。結構真面目

だ。
「じゃあこれでお開きよ。セシルは悪いけどここに残ってね。手伝ってもらう事や手伝う事が有るから。」
これからどうなって行くのでしょうね？楽しみで仕方ないわ。

第十八話～十六年前？～（後書き）

どうもです。

長くなりますよ？読み飛ばしていいです。

今回の話しはすぐにできたのですが手直しや書きたし減らしたりなど色々ありすぎて遅れました。
言い訳しても仕方ないので次です。
この話題名にも有るとおり旅をする話しですがまだ旅は当分しません。経験を積んでからと言った所ですか。まあ、経験と言っても基本的な事だけですが、セシルをできるだけいかしたいがなにぶん難しいどうしよう。
この話しは、最初パソコンでかいてそのあとケータイで修正してなどあちこっち修正などのオンパレードだったので誤字脱字がひどいかもしれません。

そんなこんなで、次の次ぐらいに勇者のパーティーメンバーが出てきます。やっと出せます。
別に出さなくても問題無いけどね。基本的無関係だし。
あと、マサキくんは真面目キャラではありません。多分。

とゆうわけで、次回は

次回予告「整理整頓」

整理整頓するのは状況じゃなくて放りっぱなしの黒のリストバンドの中身です。

訂正

自害→自殺

その他誤字を直しました

十月七日

かけてなかった部分を付けたしました

第十九話～整理整頓～（前書き）

遅くなりました。

第十九話～整理整頓～

――マサキの部屋――

木で作られている少し豪華な扉を閉める。
（ふぅ、疲れたな。今晩はパーティーがあるとか言ってたけど嫌だな。）
テーブルの前にあるソファーに腰をかける。
ソファーは素人でもわかるくらい高級な物で座り心地が良かった。

別に俺はパーティーが嫌いでは無い、祭りとかは好きな方な方だけど、今回のパーティだけは出たく無かった。
だって考えてみろ勇者お披露目に開かれるパーティに勇者でも無い異世界人が一人、確実に注目される。
注目されるのは好きじゃ無い、伊達に十六年間地味キャラを続けてきたわけでわないのですよ。そんな奴が国中の偉い人とかに注目される、胃に穴があきそうだ。

こうなったら姿を消す魔法でも作るかと本気で考えていたときに、サヤ王妃に貰った物を思い出す。
サヤ王妃に渡されたのは黒い長方形の石に刻印が書かれた白い布が巻かれた物だった。

魔力を流すと石から電流が流れて相手を＜スタン＞（気絶させる雷の魔法）と同じ効果が得られる物らしい。流す魔力は無属性でもいいらしく、俺にぴったりの道具と言うことだ。

残念な事は使い捨てでそこそこ高い物らしい、それでも一家に一つ

ぐらいあるらしいので頑張れば買う事ができるかもしれないな。
黒のリストバンドに入れようとしたが、入れ方が分からない。なんか前にもあった気がする気のせいだよね？
取り敢えず魔力を流してみる黒のリストバンドは光っている。やり方としてはあってるらしい、とゆうか使い方ぐらい聞いとけよ俺。

魔力を流した状態でリストバンドに物を入れると念じてみる、するとリストバンドから光の輪が浮かんできた。
（こんなかに入れると、おお入った！）
光の中に入れるとスタンガンもどきは入って消えてしまった。
その後、リストの中でスタンガンもどきを探して見る。あったにはあったんだけどリストバンドの中グチャグチャだな適当に物をいれてるせいか探しにくい事この上無しだ。
整頓するために、一気に全部出してみる。
（多いな本当に。）
目の前に大量に現れた物に苦笑いしながら俺は掃除に取り掛かった。

二時間後
「終わった～」
つい独り言が出てしまうほど多かった。弓道関連の物だけだと侮っていたが予想以上に多かった。アーチェリー関連の物があったが正直使う予定が無い。多分このまま眠っているだろう。
中にあった物を紹介して行きたいと思う。

和弓１７ｋｇ（竹弓では無い。）
矢六本（上に同じく竹矢では無い。）
変え弦三本
弓道用具

洋弓
矢
アーチェリー用具

スタンガンもどき
警棒二号（多分母親の私物？詳しくは分からなかった。）
警棒三号（上に同じ）

弓道用袴
Ｔシャツ二枚
半ズボン二枚

以上の物が入っていた。何で警棒があるかは知らん。母親が警察官で防犯グッズとか好きだったからあるんじゃね？とゆう予想で一段落した。
当面の問題は変え弦が三本しか無いことだ、
まだ作っていない変え弦が一本今付けているのが一本合計五本だが、一年持つかどうだか分からない。この世界にも弓があるはずだから、弦の作り方を探さなくてはいけない様だ。

とゆうわけで、
「魔法の自主練と研究でもするか。」
今までに二回使う機会があったが、魔法の燃費が悪すぎる。本当は魔力量がそこそこ多い

俺がすぐなくなるのは理由があると思うんだ。
考えられる理由
1．体が魔力に慣れてないため燃費が悪い
2．使ってる魔法が悪いまたは技術的に悪い
3．体質的に悪い

1と2はともかく、3だと絶望的だな。
1はこれから慣れていくしか無いが2が原因なら検討が付いている
＜絶対防御＞だ。
＜絶対防御＞を使った後はガリガリ魔力が削られていったのを覚えている。闘技場の試合のときは、槍を作る時にもっと魔力を節約できたはずだろうからこれは技術的
――マサキの部屋――

木で作られている少し豪華な扉を閉める。
（ふぅ、疲れたな。今晩はパーティーがあるとか言ってたけど嫌だな。）
テーブルの前にあるソファーに腰をかける。
ソファーは素人でもわかるくらい高級な物で座り心地が良かった。

別に俺はパーティーが嫌いでは無い、祭りとかは好きな方な方だけど、今回のパーティだけは出たく無かった。
だって考えてみろ勇者お披露目に開かれるパーティに勇者でも無い異世界人が一人、確実に注目される。
注目されるのは好きじゃ無い、伊達に十六年間地味キャラを続けてきたわけでわないのですよ。そんな奴が国中の偉い人とかに注目される、胃に穴があきそうだ。

こうなったら姿を消す魔法でも作るかと本気で考えていたときに、サヤ王妃に貰った物を思い出す。

サヤ王妃に渡されたのは黒い長方形の石に刻印が書かれた白い布が巻かれた物だった。

魔力を流すと石から電流が流れて相手を<スタン>（気絶させる雷の魔法）と同じ効果が得られる物らしい。流す魔力は無属性でもいいらしく、俺にぴったりの道具と言うことだ。

残念な事は使い捨てでそこそこ高い物らしい、それでも一家に一つぐらいあるらしいので頑張れば買う事ができるかもしれないな。

黒のリストバンドに入れようとしたが、入れ方が分からない。なんか前にもあった気がする気のせいだよね？

取り敢えず魔力を流してみる黒のリストバンドは光っている。やり方としてはあってるらしい、とゆうか使い方ぐらい聞いとけよ俺。

魔力を流した状態でリストバンドに物を入れると念じてみる、するとリストバンドから光の輪が浮かんできた。

（こんなかに入れると、おお入った！）

光の中に入れるとスタンガンもどきは入って消えてしまった。

その後、リストの中でスタンガンもどきを探して見る。あったにはあったんだけどリストバンドの中グチャグチャだな適当に物をいれてるせいか探しにくい事この上無しだ。

整頓するために、一気に全部出してみる。

（多いな本当に。）

目の前に大量に現れた物に苦笑いしながら俺は掃除に取り掛かった。

二時間後
「終わった～」
つい独り言が出てしまうほど多かった。弓道関連の物だけだと侮っていたが予想以上に多かった。アーチェリー関連の物があったが正直使う予定が無い。多分このまま眠っているだろう。
中にあった物を紹介して行きたいと思う。

和弓１７ｋｇ（竹弓では無い。）
矢六本（上に同じく竹矢では無い。）
変え弦三本
弓道用具

洋弓
矢
アーチェリー用具

スタンガンもどき
警棒二号（多分母親の私物？詳しくは分からなかった。）
警棒三号（上に同じ）

弓道用袴
Ｔシャツ二枚
半ズボン二枚

以上の物が入っていた。何で警棒があるかは知らん。母親が警察官で防犯グッズとか好きだったからあるんじゃね？とゆう予想で一段落した。
当面の問題は変え弦が三本しか無いことだ、

まだ作っていない変え弦が一本今付けているのが一本合計五本だが、一年持つかどうだか分からない。この世界にも弓があるはずだから、弦の作り方を探さなくてはいけない様だ。

とゆうわけで、

「魔法の自主練と研究でもするか。」

今までに二回使う機会があったが、魔法の燃費が悪すぎる。本当は魔力量がそこそこ多い

俺がすぐなくなるのは理由があると思うんだ。

考えられる理由

1．体が魔力に慣れてないため燃費が悪い

2．使ってる魔法が悪いまたは技術的に悪い

3．体質的に悪い

1と2はともかく、3だと絶望的だな。

1はこれから慣れていくしか無いが2が原因なら検討が付いている

＜絶対防御＞だ。

＜絶対防御＞を使った後はガリガリ魔力が削られていったのを覚えている。闘技場の試合のときは、槍を作る時にもっと魔力を節約できたはずだろうからこれは技術的な物だろう。

「＜この世界にいる神よ！我が友を護る為にその力をよこせ。＞」

＜絶対防御＞

＜我が身を守り敵を切るための剣俺の望みに答えろ＞　＜ガードソード＞

＜詠唱破棄＞をしてしまうと魔力が馬鹿

――マサキの部屋――

木で作られている少し豪華な扉を閉める。

（ふぅ、疲れたな。今晩はパーティーがあるとか言ってたけど嫌だ

な。）
テーブルの前にあるソファーに腰をかける。
ソファーは素人でもわかるくらい高級な物で座り心地が良かった。
別に俺はパーティーが嫌いでは無い、祭りとかは好きな方な方だけど、今回のパーティだけは出たく無かった。
だって考えてみろ勇者お披露目に開かれるパーティに勇者でも無い異世界人が一人、確実に注目される。
注目されるのは好きじゃ無い、伊達に十六年間地味キャラを続けてきたわけでわないのですよ。そんな奴が国中の偉い人とかに注目される、胃に穴があきそうだ。

こうなったら姿を消す魔法でも作るかと本気で考えていたときに、サヤ王妃に貰った物を思い出す。
サヤ王妃に渡されたのは黒い長方形の石に刻印が書かれた白い布が巻かれた物だった。

魔力を流すと石から電流が流れて相手を＜スタン＞（気絶させる雷の魔法）と同じ効果が得られる物らしい。流す魔力は無属性でもいいらしく、俺にぴったりの道具と言うことだ。

残念な事は使い捨てでそこそこ高い物らしい、それでも一家に一つぐらいあるらしいので頑張れば買う事ができるかもしれないな。

黒のリストバンドに入れようとしたが、入れ方が分からない。なんか前にもあった気がする気のせいだよね？
取り敢えず魔力を流してみる黒のリストバンドは光っている。やり方としてはあってるらしい、とゆうか使い方ぐらい聞いとけよ俺。
魔力を流した状態でリストバンドに物を入れると念じてみる、する

とリストバンドから光の輪が浮かんできた。
（こんなかに入れると、おお入った！）
光の中に入れるとスタンガンもどきは入って消えてしまった。
その後、リストの中でスタンガンもどきを探して見る。あったにはあったんだけどリストバンドの中グチャグチャだな適当に物をいれてるせいか探しにくい事この上無しだ。
整頓するために、一気に全部出してみる。
（多いな本当に。）
目の前に大量に現れた物に苦笑いしながら俺は掃除に取り掛かった。

二時間後
「終わった～」
つい独り言が出てしまうほど多かった。弓道関連の物だけだと侮っていたが予想以上に多かった。アーチェリー関連の物があったが正直使う予定が無い。多分このまま眠っているだろう。
中にあった物を紹介して行きたいと思う。

和弓１７ｋｇ（竹弓では無い。）
矢六本（上に同じく竹矢では無い。）
変え弦三本
弓道用具

洋弓
矢
アーチェリー用具

スタンガンもどき
警棒二号（多分母親の私物？詳しくは分からなかった。）
警棒三号（上に同じ）

弓道用袴
Tシャツ二枚
半ズボン二枚

以上の物が入っていた。何で警棒があるかは知らん。母親が警察官で防犯グッズとか好きだったからあるんじゃね？とゆう予想で一段落した。
当面の問題は変え弦が三本しか無いことだ、
まだ作っていない変え弦が一本今付けているのが一本合計五本だが、一年持つかどうだか分からない。この世界にも弓があるはずだから、弦の作り方を探さなくてはいけない様だ。

とゆうわけで、
「魔法の自主練と研究でもするか。」
今までに二回使う機会があったが、魔法の燃費が悪すぎる。本当は魔力量がそこそこ多い
俺がすぐなくなるのは理由があると思うんだ。
考えられる理由
1．体が魔力に慣れてないため燃費が悪い
2．使ってる魔法が悪いまたは技術的に悪い
3．体質的に悪い

1と2はともかく、3だと絶望的だな。
1はこれから慣れていくしか無いが2が原因なら検討が付いている

＜絶対防御＞だ。
＜絶対防御＞を使った後はガリガリ魔力が削られていったのを覚えている。闘技場の試合のときは、槍を作る時にもっと魔力を節約できたはずだろうからこれは技術的
にならないので詠唱をして呼び出す。

――マサキの部屋――

木で作られている少し豪華な扉を閉める。
（ふぅ、疲れたな。今晩はパーティーがあるとか言ってたけど嫌だな。）
テーブルの前にあるソファーに腰をかける。
ソファーは素人でもわかるくらい高級な物で座り心地が良かった。

別に俺はパーティーが嫌いでは無い、祭りとかは好きな方な方だけど、今回のパーティだけは出たく無かった。
だって考えてみろ勇者お披露目に開かれるパーティに勇者でも無い異世界人が一人、確実に注目される。
注目されるのは好きじゃ無い、伊達に十六年間地味キャラを続けてきたわけでわないのですよ。そんな奴が国中の偉い人とかに注目される、胃に穴があきそうだ。

こうなったら姿を消す魔法でも作るかと本気で考えていたときに、サヤ王妃に貰った物を思い出す。
サヤ王妃に渡されたのは黒い長方形の石に刻印が書かれた白い布が巻かれた物だった。

魔力を流すと石から電流が流れて相手を＜スタン＞（気絶させる雷の魔法）と同じ効果が得られる物らしい。流す魔力は無属性でもいいらしく、俺にぴったりの道具と言うことだ。

残念な事は使い捨てでそこそこ高い物らしい、それでも一家に一つぐらいあるらしいので頑張れば買う事ができるかもしれないな。

黒のリストバンドに入れようとしたが、入れ方が分からない。なんか前にもあった気がする気のせいだよね？

取り敢えず魔力を流してみる黒のリストバンドは光っている。やり方としてはあってるらしい、とゆうか使い方ぐらい聞いとけよ俺。

魔力を流した状態でリストバンドに物を入れると念じてみる、するとリストバンドから光の輪が浮かんできた。

（こんなかに入れると、おお入った！）

光の中に入れるとスタンガンもどきは入って消えてしまった。

その後、リストの中でスタンガンもどきを探して見る。あったにはあったんだけどリストバンドの中グチャグチャだな適当に物をいれてるせいか探しにくい事この上無しだ。

整頓するために、一気に全部出してみる。

（多いな本当に。）

目の前に大量に現れた物に苦笑いしながら俺は掃除に取り掛かった。

二時間後

「終わった～」

つい独り言が出てしまうほど多かった。弓道関連の物だけだと侮っていたが予想以上に多かった。アーチェリー関連の物があったが正直使う予定が無い。多分このまま眠っているだろう。

中にあった物を紹介して行きたいと思う。

和弓１７ｋｇ（竹弓では無い。）
矢六本（上に同じく竹矢では無い。）
変え弦三本
弓道用具

洋弓
矢
アーチェリー用具

スタンガンもどき
警棒二号（多分母親の私物？詳しくは分からなかった。）
警棒三号（上に同じ）

弓道用袴
Ｔシャツ二枚
半ズボン二枚

以上の物が入っていた。何で警棒があるかは知らん。母親が警察官で防犯グッズとか好きだったからあるんじゃね？とゆう予想で一段落した。
当面の問題は変え弦が三本しか無いことだ、
まだ作っていない変え弦が一本今付けているのが一本合計五本だが、一年持つかどうだか分からない。この世界にも弓があるはずだから、弦の作り方を探さなくてはいけない様だ。

とゆうわけで、
「魔法の自主練と研究でもするか。」

今までに二回使う機会があったが、魔法の燃費が悪すぎる。本当は魔力量がそこそこ多い
俺がすぐなくなるのは理由があると思うんだ。
考えられる理由
1．体が魔力に慣れてないため燃費が悪い
2．使ってる魔法が悪いまたは技術的に悪い
3．体質的に悪い

1と2はともかく、3だと絶望的だな。
1はこれから慣れていくしか無いが2が原因なら検討が付いている
＜絶対防御＞だ。
＜絶対防御＞を使った後はガリガリ魔力が削られていったのを覚えている。闘技場の試合のときは、槍を作る時にもっと魔力を節約できたはずだろうからこれは技術的
――マサキの部屋――

木で作られている少し豪華な扉を閉める。
（ふぅ、疲れたな。今晩はパーティーがあるとか言ってたけど嫌だな。）
テーブルの前にあるソファーに腰をかける。
ソファーは素人でもわかるくらい高級な物で座り心地が良かった。

別に俺はパーティーが嫌いでは無い、祭りとかは好きな方な方だけど、今回のパーティだけは出たく無かった。
だって考えてみろ勇者お披露目に開かれるパーティに勇者でも無い異世界人が一人、確実に注目される。
注目されるのは好きじゃ無い、伊達に十六年間地味キャラを続けてきたわけでわないのですよ。そんな奴が国中の偉い人とかに注目される、胃に穴があきそうだ。

こうなったら姿を消す魔法でも作るかと本気で考えていたときに、サヤ王妃に貰った物を思い出す。
サヤ王妃に渡されたのは黒い長方形の石に刻印が書かれた白い布が巻かれた物だった。

魔力を流すと石から電流が流れて相手を＜スタン＞（気絶させる雷の魔法）と同じ効果が得られる物らしい。流す魔力は無属性でもいいらしく、俺にぴったりの道具と言うことだ。

残念な事は使い捨てでそこそこ高い物らしい、それでも一家に一つぐらいあるらしいので頑張れば買う事ができるかもしれないな。

黒のリストバンドに入れようとしたが、入れ方が分からない。なんか前にもあった気がする気のせいだよね？
取り敢えず魔力を流してみる黒のリストバンドは光っている。やり方としてはあってるらしい、とゆうか使い方ぐらい聞いとけよ俺。

魔力を流した状態でリストバンドに物を入れると念じてみる、するとリストバンドから光の輪が浮かんできた。
（こんなかに入れると、おお入った！）
光の中に入れるとスタンガンもどきは入って消えてしまった。
その後、リストの中でスタンガンもどきを探して見る。あったにはあったんだけどリストバンドの中グチャグチャだな適当に物をいれてるせいか探しにくい事この上無しだ。
整頓するために、一気に全部出してみる。
（多いな本当に。）
目の前に大量に現れた物に苦笑いしながら俺は掃除に取り掛かった。

二時間後
「終わった～」
つい独り言が出てしまうほど多かった。弓道関連の物だけだと侮っていたが予想以上に多かった。アーチェリー関連の物があったが正直使う予定が無い。多分このまま眠っているだろう。
中にあった物を紹介して行きたいと思う。

和弓１７ｋｇ（竹弓では無い。）
矢六本（上に同じく竹矢では無い。）
変え弦三本
弓道用具

洋弓
矢
アーチェリー用具

スタンガンもどき
警棒二号（多分母親の私物？詳しくは分からなかった。）
警棒三号（上に同じ）

弓道用袴
Ｔシャツ二枚
半ズボン二枚

以上の物が入っていた。何で警棒があるかは知らん。母親が警察官で防犯グッズとか好きだったからあるんじゃね？とゆう予想で一段

落した。
当面の問題は変え弦が三本しか無いことだ、
まだ作っていない変え弦が一本今付けているのが一本合計五本だが、
一年持つかどうだか分からない。この世界にも弓があるはずだから、
弦の作り方を探さなくてはいけない様だ。

とゆうわけで、
「魔法の自主練と研究でもするか。」
今までに二回使う機会があったが、魔法の燃費が悪すぎる。本当は
魔力量がそこそこ多い
俺がすぐなくなるのは理由があると思うんだ。
考えられる理由
1．体が魔力に慣れてないため燃費が悪い
2．使ってる魔法が悪いまたは技術的に悪い
3．体質的に悪い

1と2はともかく、3だと絶望的だな。
1はこれから慣れていくしか無いが2が原因なら検討が付いている
＜絶対防御＞だ。
＜絶対防御＞を使った後はガリガリ魔力が削られていったのを覚え
ている。闘技場の試合のときは、槍を作る時にもっと魔力を節約で
きたはずだろうからこれは技術的な物だろう。

「＜この世界にいる神よ！我が友を護る為にその力をよこせ。＞」
＜絶対防御＞
＜我が身を守り敵を切るための剣俺の望みに答えよ＞＜ガードソー
ド＞

今思ったけど中2くさいな後で直す事って出来ないのかな？

目の前に作った<絶対防御>を<ガードソード>で切りつける、切りつけられた部分は少したったら切られた場所は修復されていった。
切りつける、修復されるを繰り返すと気がついてきた事があった。
修復される時俺の魔力が削られて行っている事だ。
つまり、カルニストの戦いで馬鹿みたいに魔力が削れたのはこのせいらしい。

どうやったら魔力の供給を止めるか考えていると部屋の扉を叩く音がした。
どうやらパーティーの時間らしい。
行きたく無いな〜

とある話2

今の勇者の一世代前の勇者がいた。
彼は雷を使いこなす勇者でその力を持って魔王討伐に大きく貢献した。
魔王を討伐した後、綺麗なエルフの女性と出会い結婚し子供も生まれその子供もすくすくと育っていった。
生まれた子は二人
長男は武術の才能に目覚め軍に入ってみんなを守ると言う正義心が高い子だった。
長女は体は弱かったが手先の器用さと魔法の才能があった。
勇者は長男の稽古を付けながら知り合いの刻印師の所によく長女を連れていっていた。
長女は刻印で何かを作るのがとても好きだった。

ある日、刻印師の所にいったまま帰ってこないと勇者は不安になっていると一つの連絡が回ってきた。
「長女は誘拐された。」
勇者たちは、必死になって探した。
そして、誘拐犯のアジトを見つけそこに入って勇者が見たのはアジトの中で気絶している誘拐犯と黒い石を持ってその場に座り込んでいる長女だった。
その長女は刻印師から貰った石を媒体として
雷の刻印を書きそれをスタンガンとして使ったといわれている。
その後、長女はその刻印式を世界中に発表しスタンガンを広めて行ったとさ。

――シャルの部屋――
「この魔法具にはそんな話しがあるんだ。」
今日は城で勇者のお披露目しきで私みたいな下流貴族でも呼ばれた。理由とはしては私が宮廷魔導士になったからだ。これから魔王との戦いに備えるらしく忙しくしていたが、今年で十六歳になったのとが重なり晴れてパーティーに参加する事ができた。
母さんからもこの＜スタンガン＞を貰ったのであった。
「さあ、頑張りましょ。目指せ玉の輿？」

第十九話～整理整頓～（後書き）

軽く新キャラを出してみました。

どうでしょう？

次回予告

「パーティー？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8919v/

間違いから始まる異世界の旅

2011年10月13日20時33分発行